

道ノ下遺跡
第2次発掘調査報告書
— 宅地造成工事に伴う発掘調査 —



令和2年3月
彦根市

道ノ下遺跡
第 2 次発掘調査報告書
— 宅地造成工事に伴う発掘調査 —

令和 2 年 3 月
彦根市

例 言

1. 本書は彦根市東沼波町に所在する道ノ下遺跡の第2次発掘調査報告書である。

2. 調査に関する調整、現地調査ならびに整理調査は彦根市が行った。所在地・調査期間等については以下のとおりである。

現地調査 所在地：彦根市東沼波町字八反切 1036番 外 26筆

調査原因：宅地造成工事

期間：平成29年6月15日～平成30年3月29日

整理調査 期間：令和元年7月18日～令和2年3月29日

3. 本調査は、彦根市教育委員会文化財部文化財課（平成31年4月1日～彦根市市長直轄組織文化財課）が実施した。

各年度の調査の体制は下記のとおりである。

【平成29年度】（現地調査）

彦根市教育委員会文化財部文化財課

教育長：善住喜太郎

文化財部長：馬場孝雄

文化財部次長：廣瀬清隆

文化財課長：稻野善行

課長補佐兼管理係長：坂坂崇

史跡整備係長：北川恭子

文化財係長：三尾次郎

主査：深谷覚

主査：林昭男

副主査：戸塚洋輔

副主査：田中良輔

副主査：小林圭一

副主査：渡邊暉

主任：斎藤一真

主任：下高大輔

主事：秋篠功二（平成29年4月1日～文化庁派遣）

主任：船山友祐

臨時職員：沖田陽一

臨時職員：堀田佳典

臨時職員：小山佳祐

【令和元年度】（整理調査・報告書刊行）

彦根市市長直轄組織文化財課

市長：大久保 貴

副市長：廣瀬清隆

参事：山本茂春

主幹兼歴史民俗資料室長：井伊岳夫

文化財課長：松宮智之

主幹兼史跡整備係長：鈴木康弘

課長補佐兼管理係長：牧田歩

主査：深谷覚

文化財係長：三尾次郎

主査：戸塚洋輔

主査：林昭男

主査：多賀公一

主査：田中良輔

主事：西坊仁志

主任：斎藤一真

主任：船山友祐

主任：下高大輔（平成30年4月1日～熊本市経済観光局派遣）

技師：内藤京

主事：秋篠功二（平成29年4月1日～文化庁派遣）

技師：内藤京

臨時職員：沖田陽一

臨時職員：樋口杏奈

臨時職員：飯島由紀子

4. 現地調査と整理調査は林が担当し、以下の諸氏が参加した。

現地調査：伊東幸一 小野直子 川窪弘美 小森敏夫 小山元一 後藤憲男 寺村芳和 外海正司

中村義浩 西関邦夫 西村豊和 林竹夫 久木正弘 松井義之 吉田輝一（以上、調査作業員）

久保亮二 樋口杏奈（以上、調査補助員）

整理調査：久保亮二 小野直子（以上、整理補助員）

5. 整理調査において京都市立芸術大学教授畠中英二氏、滋賀県教育委員会文化財保護課北村圭弘氏、米原市教育委員会高橋順之氏、日野町教育委員会振角卓哉氏のご教授を得た。
6. 本書で使用した遺構実測図は、林 昭男、堀田佳典、樋口杏奈、久保亮二、小野直子、川嶋弘美が作成し、遺物実測図は、林、樋口杏奈、久保亮二が作成した。遺構と遺物の写真撮影は、林が行った。
7. 本書の執筆及び編集は、林が行った。
8. 本書で使用した方位は真北に、高さは東京湾平均海面に基づく。
9. 本調査で出土した遺物や写真・図面等は彦根市で保管している。
10. 本書で報告する土器の断面と種類の関係は、以下のとおりである。
土師器 須恵器
-

目 次

例言

第1章 序 論

第1節 調査に至る経緯と経過	1
(1) 調査に至る経緯	1
(2) 発掘調査の経過と方法	2
(3) 整理調査の経過と方法	2
第2節 地理的・歴史的環境	3
(1) 地理的環境	3
(2) 歴史的環境	7
(3) 道ノ下遺跡の概要と既往調査	9

第2章 発掘調査の成果

第1節 基本土層	13
第2節 検出遺構と遺物	13
(1) 概 要	13
(2) 包含層・遺構面精査時出土遺物	13
(3) 自然流路	14
(4) 竪穴建物	23
(5) 掘立柱建物	29
(6) 横	38
(7) 溝	38
(8) 土 坑	40
(9) 小 穴	54
(10) その他	55
(11) 小 結	56

第3章 総括

第1節 調査の成果と課題について	58
(1) 道ノ下遺跡と芹川の関わり	58
(2) 道ノ下遺跡の古代集落の様相と今後の課題	58

図版

報告書抄録

第1章 序論

第1節 調査に至る経緯と経過

(1) 調査に至る経緯(図4~6)

本書は、民間開発により実施した道ノ下遺跡第2次（彦根市東沼波町字八反切1036番外26筆）発掘調査の成果をまとめたものである。

道ノ下遺跡は、彦根市東沼波町に所在する古墳時代から中世にかけての遺跡である。芹川が形成する扇状地の扇端部の標高約100.5mに位置する。当該遺跡の東方約500mの位置に東山道が南北に縦貫している。調査地周辺一帯は長年水田や畠などの耕作地としての土地利用が広がっていたが、近年では宅地造成や集合住宅などの開発が進んでいる地域である。今回の調査地点も開発計画以前は耕作地としての土地利用が行われていた。

今回の記録保存を目的とする発掘調査は、民間開発事業者が計画した宅地造成工事に先立ち提出された文化財保護法第93条の届出（平成28年11月9日付け）及び調査依頼（平成28年11月9日付け）に基づくものである。届出の提出に伴い、開発予定地における遺構・遺物の有無を確認するため、平成29年1月31日、2月8日、4月21日、4月27日に試掘調査を実施した。試掘調査は、開発予定面積9,602.54m²を対象として試掘トレーナーを24箇所（2m×2m）設定してバックホーにて掘削、細部は人力による掘削・検出作業を行い、遺構・遺物の確認を行った。

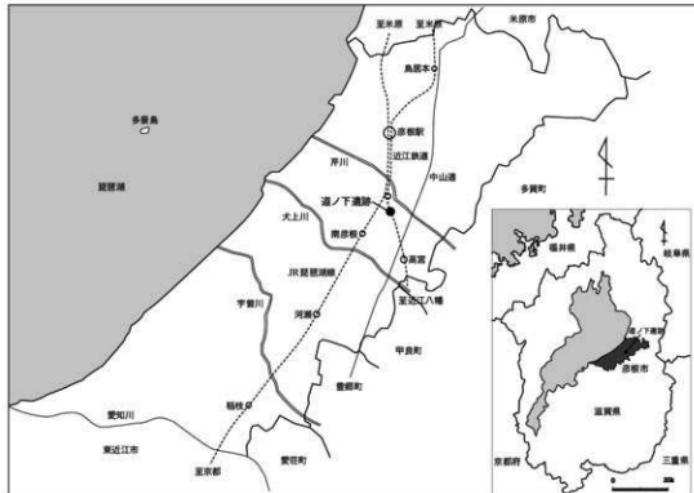


図1 道ノ下遺跡位置図

試掘調査の結果、基本層序として 1 層：黄灰色粘質土、2 層：黄褐色粘質土、3 層：黒褐色粘質土、4 層：にぶい黄褐色粘質土の 4 層を確認した。1・2 層は近現代の耕作土とその床土、3 層は遺物包含層、そして 4 層上面で遺構を確認することができた。その範囲だが、開発予定地北東部の一部 (T12 ~ T15) を除く全域の試掘トレンドで遺構・遺物が確認されたため、開発業者と対応に関する協議を行った。協議の結果、宅地部分に関しては全域で遺構面に対する保護層が確保されることが確認されたため記録保存調査の対象範囲から除外し、開発予定地の道路部分と調整池部分合計 2,015.00m²について今回の調査対象範囲とした。現地の発掘調査は平成 29 年 6 月 15 日に着手し、平成 30 年 3 月 29 日まで実施した。整理調査に関しては、令和元年 7 月 18 日～令和 2 年 3 月 31 日まで行い本報告書の刊行となった。

調査にあたっては、開発業者・土地所有者・近隣住民を始めとする関係者にご理解とご協力を賜った。厚くお礼を申し上げたい。

(2) 発掘調査の経過と方法

現地の発掘調査実施にあたり、彦根市と民間開発事業者との間で埋蔵文化財発掘調査事業受託契約書（平成 29 年 6 月 15 日付け）を取り交わし、契約締結後に現地調査を開始した。

調査は、試掘調査の成果に基づき、遺構面直上まで重機による掘削を行い、その後の調査は人力により行った。調査区は 1 ~ 3 区に分けた。調査予定地に一部既存の建物 (2・3 区) があるため、1 区の調査を先行して実施し、建物解体後 2・3 区の調査を実施した。グリッド設定だが、今回の調査範囲は、宅地造成工事の道路部分と調整池部分であり著しく狭長であるため、図化作業の効率を勘案して道路形状に沿う方位で 4 m × 4 m 毎のグリッド設定を行い、グリッドの基準となる複数点に平面直角座標値を落とした。グリッド番号は南東端から北西側に向かってアルファベットを付け、南西端から北東側に向かって数字を付けた。遺物は基本的に遺構・土層ごとに取り上げたが、遺構を伴わない遺物の取り上げはグリッドごとに行い、南隅にあるグリッド杭の番号に代表させた。遺構図はグリッドを基準に、1/100 の遺構分布図と 1/20 の遺構平面図を基本とし、状況に応じて 1/10 の遺物出土状況図等を作成したほか、1/20 の調査区および遺構の土層断面図を手実測により作成した。遺構番号は、各種の遺構を通じて一連の番号を与えた。ただし、掘立柱建物と柵は複数の柱穴で構成される遺構であるため、建物と柵ごとに 1 から通し番号を付与した。現地の発掘調査は平成 29 年 6 月 15 日に着手し、平成 30 年 3 月 29 日まで実施した。

(3) 整理調査の経過と方法

整理調査の実施にあたり、彦根市と民間開発事業者との間で埋蔵文化財発掘調査事業受託契約書（令和元年 7 月 18 日付け）を取り交わし、契約締結後に整理調査を開始した。

遺構図は、原図作成のちトレースを行い、図版の作成を行った。遺物は、洗浄・注記・接合・選別・実測、そして原図作成のちトレースを行い図版の作成を行うとともに、遺物の写真撮影を行った。同時に調査成果の検討・文章作成・全体の編集作業を行い報告書の刊行となった。

整理調査に関しては、令和元年7月18日着手、令和2年3月31日まで実施した。これら一連の発掘調査・整理調査によって得られた資料および成果物については彦根市で保管している。

第2節 地理的・歴史的環境

(1) 地理的環境(図1・2)

道ノ下遺跡は、彦根市東沼波町に位置する。東沼波町は、彦根市のほぼ中央、南東から北西に流れる芹川の左右両岸に広がり、道ノ下遺跡はその左岸に位置する。鈴鹿山脈に源を発する芹川は、河岸段丘を形成しながら犬上郡多賀町の久徳周辺を扇頂として西北方向に扇状地を形成している。このため川水の浸透が著しく、小河川は伏流し、水無川となっている。扇

端部となる標高100m～95m付近は湧水帯となっており、それまで伏流していた川水が地表面に表出し、以下の氾濫原を形成する。このため、この湧水を利用した水田への用水が発達している地域もある。道ノ下遺跡は、標高約100mの湧水帯に位置し、周辺には用水が多数確認できる。

調査地周辺では宅地化が進んでいるものの、今回の調査地は、調査前まで耕作地または休耕田としての土地利用がなされていた。その地割は、N-50-Wの方向軸を持つもので、東に31°～34°程度振る犬上郡条里とは異なる方向軸を持つ地域である。今回の調査地を含め、芹川左岸に位置する道ノ下遺跡周辺一帯の地割の方向は様々であり、かなり不規則な形状となっている。この状況は芹川の洪水との関わりによるものと推測される。また、道ノ下遺跡周辺には東沼波井などの複数の用水路が走っているが、これは東部で接する大堀で芹川から取水されたものであり、東沼波の東端付近に入ったところで放射状に分岐している。この分岐部分一帯は畑が多いことを考え合わせると、この用水路沿い一帯に、かつて芹川の洪水が押し寄せたことがあったと推定される。今回の調査地に関しても、北東沿いに用水が認めら

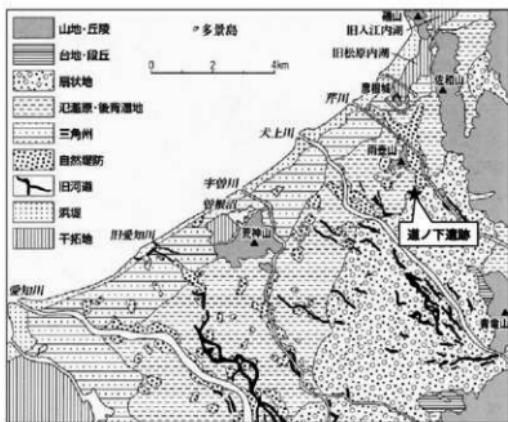


図2 彦根の自然地形(『新修彦根市史』第1巻より)

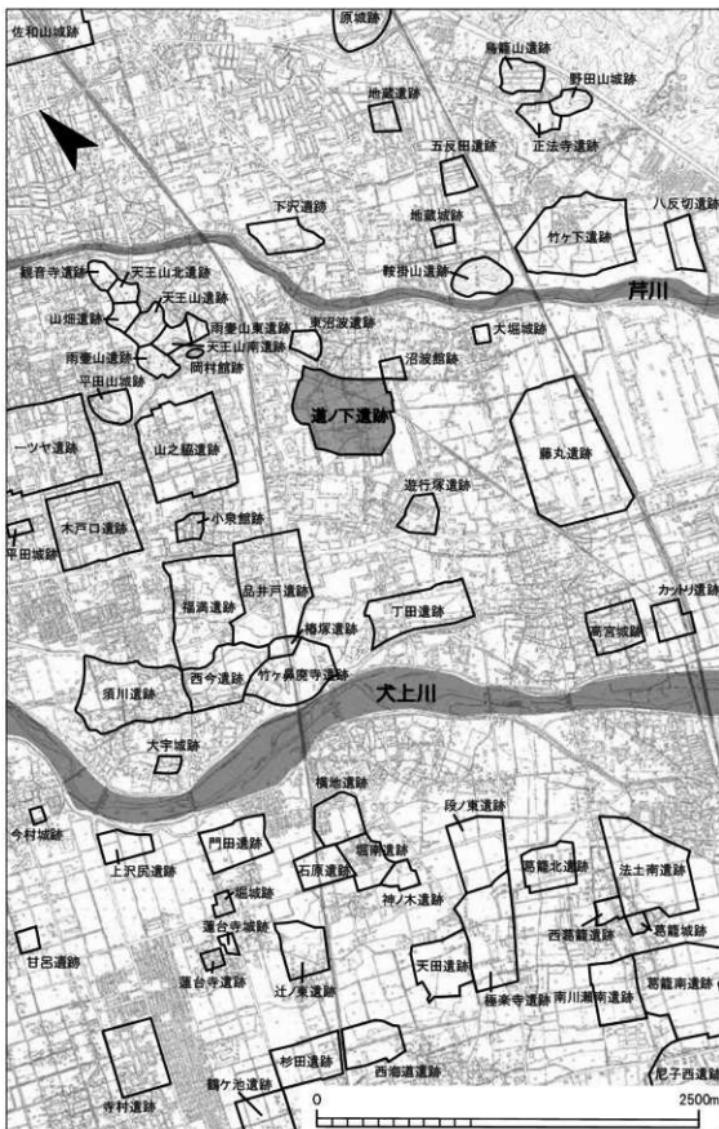


図3 道ノ下遺跡と周辺の遺跡分布図



写真1 道ノ下遺跡周辺の航空写真（平成21年12月1・2日撮影）

表1 道ノ下遺跡周辺的主要遺跡一覧

市番号	県番号 202-	遺跡の名称	所在地	種類	時代	立地	現状	備考
11	090	佐和山城跡	尼崎市 佐和山町	城郭跡	中世	山腹・山麓・平地	山林・水田	石垣・曲輪・土塁
31	031	朝音寺遺跡	尼崎市 岸川町	散布地	中世	山頂	山林	
32	032	天王山城跡	尼崎市 岸川町	散布地	古墳～平安	山頂	山林	
33	010	山城跡	尼崎市 和田町	散布地	古墳	山頂	山林	古墳?
34	033	天王山城跡	尼崎市 岸川町	散布地	中世	山腹	山林	
35	034	天王山城跡	尼崎市 岸川町	散布地	中世	山麓	山林	古墳?
36	038	雨香山城跡	尼崎市 山之脇町	散布地	古墳	山頂	山林	古墳?
37	039	雨香山城跡	尼崎市 山之脇町	散布地	中世	山麓	山林	古墳?
42	007	一ツ谷遺跡	尼崎市 幸田町	散布地	古墳～中世	平地	水田・宅地	
43	006	木戸山遺跡	尼崎市 幸田町	散布地	縄文～中世	平地	水田・宅地	
44	037	山之脇城跡	尼崎市 山之脇町	散布地	古墳～中世	平地	水田・宅地	
45	044	下沢遺跡	尼崎市 西沼波町	散布地	古墳	平地	水田・宅地	
46	046	地蔵遺跡	尼崎市 地蔵町	古墳	古墳	平地	水田・宅地	円墳
47	047	五反田遺跡	尼崎市 正法寺町	散布地	古墳	平地	水田	
48	048	鳥居山遺跡	尼崎市 正法寺町	墓跡	奈良	山麓	山林・水田・宅地	瓦窯跡
49	049	正法寺遺跡	尼崎市 正法寺町	古墳	古墳	平地	水田	
51	018	湊川遺跡	尼崎市 野島町	散布地	古墳～中世	平地	水田・宅地	
52	015	福島遺跡	尼崎市 西ノ町	集落跡	縄文～中世	平地	水田・宅地	新六代物・土坑・溝・古墳
53	016	西今井遺跡	尼崎市 西ノ町	散布地	古墳～中世	平地	水田・宅地	旧西今井通路
54	012	品井戸遺跡	尼崎市 小堀町	集落跡	縄文～中世	平地	水田・宅地	獨立社建築・石塔
55	013	博多遺跡	尼崎市 竹ヶ鼻町	古墳	古墳	平地	水田・宅地	古墳か?
56	014	竹ヶ鼻寺遺跡	尼崎市 竹ヶ鼻町	寺院・施設跡	弥生～奈良	平地	水田・宅地	
57	043	道ノ下遺跡	尼崎市 東沼波町	散布地	古墳～中世	平地	水田・宅地・工場地	
58	139	丁田遺跡	尼崎市 高宮町	散布地	古墳～中世	平地	水田・宅地	理窟土器・猪大塚
59	042	東沼波遺跡	尼崎市 東沼波町	古墳	古墳	平地	畠	
60	138	道ノ下保遺跡	尼崎市 高宮町	散布地	奈良	平地	宅地	高宮寺跡?
61	052	竹ヶ下遺跡	尼崎市 野田山町	散布地	古墳～中世	平地	水田・宅地	
62	041	藤丸遺跡	尼崎市 大曽根・高宮町	集落跡	古墳～中世	平地	水田・宅地	
63	053	八日切遺跡	尼崎市 野田山町	散布地	古墳～中世	平地	水田	
64	140	高宮遺跡	尼崎市 高宮町	城跡跡	中世	平地	宅地・学用用地	
65	141	カットリ遺跡	尼崎市 高宮町	散布地	古墳～平安	平地	水田	(多賀町)
69	055	甘足遺跡	尼崎市 甘足町	寺院跡	古墳～中世	平地	水田	甘足寺跡伝承
70	019	上沢尻遺跡	尼崎市 野瀬町	散布地	古墳～中世	平地	水田	
71	129	門田遺跡	尼崎市 遊町	散布地	古墳～奈良	平地	水田	
72	127	蓬莱寺遺跡	尼崎市 蓬莱寺町	城跡跡	中世	平地	畠・宅地	
73	063	寺村遺跡	尼崎市 日向町	散布地	古墳～平安	平地	水田・宅地	
76	130	横地遺跡	尼崎市 横町	集落跡	古墳～奈良	平地	水田・宅地	円墳
77	124	石原遺跡	尼崎市 二堂町	散布地	古墳～奈良	平地	水田・宅地	
78	125	辻ノ東遺跡	尼崎市 二堂町	散布地	古墳～奈良	平地	水田・畠・段地	
79	123	神ノ木遺跡	尼崎市 金剛寺町	集落跡	縄文～奈良	平地	水田・社地	
81	117	鶴ヶ池遺跡	尼崎市 川瀬町・堀町	散布地	古墳～平安	平地	水田・畠・道路	
82	118	杉田遺跡	尼崎市 川瀬町・堀町	散布地	古墳～平安	平地	水田・工場用地	
83	119	西吉原遺跡	尼崎市 川瀬町・堀町	散布地	古墳～平安	平地	水田・畠	
84	120	天田遺跡	尼崎市 楠葉寺町	散布地	古墳～平安	平地	水田・畠・宅地	
85	121	楓葉寺遺跡	尼崎市 楠葉寺町	集落跡	古墳～奈良	平地	水田・宅地	
86	122	四ノ東遺跡	尼崎市 桑室町	集落跡	古墳～平安	平地	水田・宅地	
87	110	西吉原遺跡	尼崎市 西吉原町	古墳跡・集落跡	古墳～中世	平地	水田・畠・段地	円墳
88	111	西吉原遺跡	尼崎市 西吉原町	古墳	古墳	平地	宅地	円墳
140	131	福南遺跡	尼崎市 堀町	集落跡	弥生～奈良	平地	水田・宅地	
141	109	三毛山南遺跡	尼崎市 蔦屋町	散布地	古墳～中世	平地	水田・宅地	
142	115	菖蒲山南遺跡	尼崎市 川瀬町・堀町	集落跡	古墳～中世	平地	水田・宅地	
143	108	菖蒲山南遺跡	尼崎市 蒜山町	散布地	古墳～中世	平地	水田・宅地	
146	197	尼子西遺跡	尼崎市 出町	集落跡	奈良・平安	平地	宅地	
153	008	平田御跡	尼崎市 平田町	城跡跡	中世	平地	宅地・社地	
154	009	平田山城跡	尼崎市 平田町	城跡跡	中世	平地	宅地	
155	011	東丸御跡	尼崎市 小堀町	城跡跡	中世	平地	宅地	
156	021	大字御跡	尼崎市 宇尾町	城跡跡	中世	平地	水田・宅地	
159	035	沼波御跡	尼崎市 東沼波町	城跡跡	中世	平地	水田	
160	036	岡村御跡	尼崎市 岡町	城跡跡	中世	平地	山林・宅地	
161	040	大堀御跡	尼崎市 大堀町	城跡跡	中世	平地	水田	
162	045	堀藏御跡	尼崎市 地蔵町	城跡跡	中世	平地	水田	
163	051	野山田城跡	尼崎市 野山田町	城跡跡	中世	平地	山林	瓦窯跡
165	056	今村城跡	尼崎市 今村町	城跡跡	中世	平地	水田・宅地	
174	094	原城跡	尼崎市 原町	城跡跡	中世	山頂	その他	
180	107	菖蒲山城跡	尼崎市 蒜山町	城跡跡	中世	平地	宅地	
182	126	蓬台寺城跡	尼崎市 蓬台寺町	城跡跡	中世	平地	宅地	
183	128	堀城跡	尼崎市 堀町	城跡跡	中世	平地	水田	
203	200	難掛山遺跡	尼崎市 正法寺町	古墳	古墳	山頂	山林	埴輪片表採の報告あり

れることより、過去の洪水の影響が考慮される。

(2) 歴史的環境（図3・表1）

縄文時代 屋中寺廃寺で早期の高山寺式土器、福満遺跡で前期の大歳山式土器が確認されている。このように早期より遺物の出土は確認されるが、遺構を伴い、遺物量が増加するのは中期末から晩期に入ってからである。犬上川流域では福満遺跡を中心に、土田遺跡・敏満寺遺跡（多賀町）・小川原遺跡・北落遺跡・金屋遺跡（甲良町）などが当該期に当る。土田遺跡・小川原遺跡では、甕棺墓や集石遺構などが確認されている。

弥生時代 前期の様相は不明瞭だが、芹川流域の大岡遺跡（多賀町）や犬上川流域の尼子遺跡・北落遺跡・金屋遺跡（甲良町）などの扇状地で土器が出土している。これらは、縄文時代後・晩期から継続している立地であるが、これ以降継続するものではない。市域では竹ヶ鼻廃寺遺跡や稻里遺跡で前期の土器の出土が確認されている。中期以降は、琵琶湖側の沖積低地部に遺跡の分布は移動する。宇曾川流域には、中期の集落遺跡である川瀬馬場遺跡、同じく集落遺跡で中期から後期にまで及ぶ妙楽寺遺跡がある。犬上川流域では、後期の方形周溝墓などが確認されている堀南遺跡、同じく後期で竪穴住居を伴った福満遺跡がある。このように、中期以降宇曾川・犬上川流域では、扇状地の扇端より下流の沖積低地部に集落が展開する傾向にある。これは、扇状地の扇端部における湧水の灌漑利用との関係が考えられる。また、愛知川流域の稻部遺跡・稻部西遺跡では弥生時代後期後半から古墳時代初頭を中心とする拠点集落が確認されている。

古墳時代 古墳時代では、前期末に荒神山山頂付近に大型の前方後円墳である荒神山古墳が築造される。その規模・立地などから、愛知郡・犬上郡を含む湖東平野北部を代表する首長墓と考えられる。同時期の湖東平野北部に広がる集落遺跡としては、藤丸遺跡・品井戸遺跡・福満遺跡・堀南遺跡・横地遺跡・段の東遺跡・木曾遺跡（多賀町）・土田遺跡（多賀町）などがある。そして、中・後期段階になって、正法寺古墳群・葛籠北遺跡・横地遺跡・神ノ木遺跡・段ノ東遺跡・鞍掛山などに古墳が築造されるようになる。川瀬馬場遺跡周辺地域では、愛知川と宇曾川に挟まれた沖積地で集落の形成が顕著となる。下流域の普光寺遺跡では初頭から前期、芝原遺跡では前期を中心に確認されており、中流域の稻部遺跡や長野遺跡（愛荘町）でも同時期の集落が形成される。これらの遺跡は中期になると衰退し、この時期の遺跡数は少ない。後期になると、芝原遺跡で再び集落が形成され、なます遺跡（愛荘町）で6世紀末頃の切妻大壁造建物が検出されていることは特筆され、渡来系氏族との関係が推測される。

白鳳～奈良時代 7世紀後半になると、新しく伝來した仏教の影響の下に、権力の象徴が古墳から寺院へと変化する。彦根市域でもこれら古代寺院の比定地が6箇所想定されている。犬上川流域の高宮廃寺・竹ヶ鼻廃寺・八坂東遺跡、愛知川流域の屋中寺廃寺・下岡部廃寺・普光寺廃寺である。彦根市域における白鳳期の集落遺跡の状況は、未だ明らかになっていない

いが、奈良・平安時代に入ると、品井戸遺跡・竹ヶ鼻廃寺遺跡・福満遺跡・法士南遺跡・丁田遺跡などで掘立柱建物跡が検出されているため、これらのなかに前代の遺構が含まれている可能性がある。奈良時代においては、竹ヶ鼻廃寺遺跡の南東 2km付近に、畿内と東国を結ぶ推定東山道が通過しており、交通・流通面において重要な地域であったといえる。この時期、竹ヶ鼻廃寺遺跡や品井戸遺跡では、大型の掘立柱建物や、硯・石帯・銅匙などの官衙的

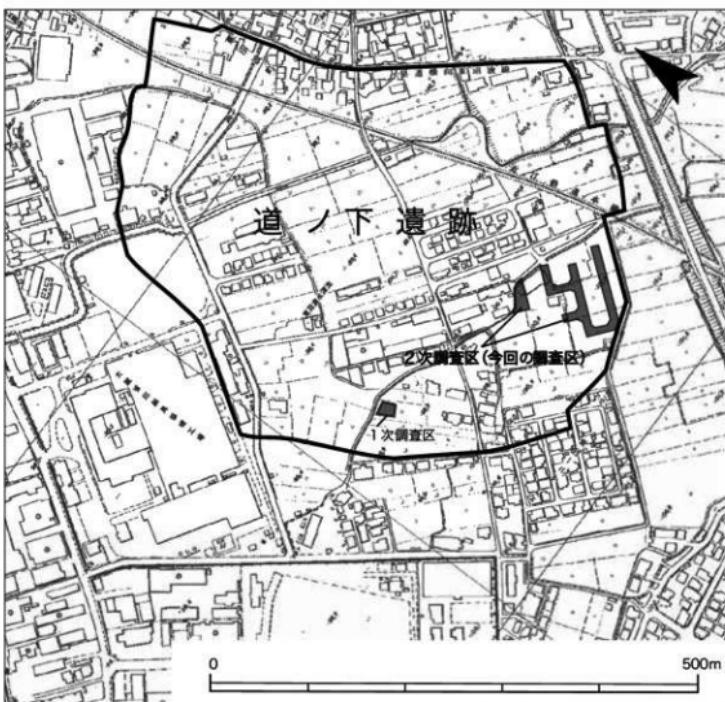


図4 調査区の位置図

表2 道ノ下遺跡発掘調査一覧

調査 次数	調査地/調査面積 (m ²)/調査原因	調査期間	調査主体	主な時代	主な検出遺構・遺物	文献
1	東沼波町 170 個人住宅建設工事	2012/8/20 ～ 2012/9/5	彦根市教育委員会	平安時代	掘立柱建物、溝、土坑 須恵器	1
2	東沼波町字八反切1036ほか 2015 宅地造成工事	2017/6/15 2018/3/29	彦根市教育委員会	奈良時代 平安時代前期	堅穴建物、掘立柱建物、樋、井戸、 土坑、小穴、 土師器、須恵器	本書

文献

1. 彦根市教育委員会 2014年度 幹線市内遺跡発掘調査報告書』彦根市教育委員会文化財調査報告書第58集

遺構・遺物が確認されており、これらより現在のJR南彦根駅周辺は犬上郡の郡衙比定地となつており、古代犬上郡における中心地であったと考えられている。また、前述の古代寺院への瓦の供給が想定される、瓦陶兼業窯の鳥籠山遺跡（正法寺瓦窯跡）や、製鉄遺跡であるキドラ遺跡などの生産遺跡も確認されている。

宇曾川以南では、奈良時代の遺跡は顕著でなく、愛知川に近い国領遺跡で確認される程度である。しかし、荒神山北側の東大寺領廟流莊の存在は特筆されるであろう。正倉院に残る墾田地図によると、愛知、犬上両郡にまたがる70町が東大寺に施入され、廟流莊が成立した。また、延久2（1070）年の『近江国弘福寺領庄田注進状』により愛知郡2条7里・8里・3条16里に弘福寺領平流莊が存在したことが記されており、さらに和銅2（709）年の『弘福寺水陸田目録』に「依智郡田壱拾壹町壱段參拾陸步」とみえることから、弘福寺領平流莊は8世紀初頭には成立していたものと考えられている。具体的な所在地としては、荒神山南麓の下岡部廃寺と屋中寺廃寺に挟まれた地と推定されている。また、この時期の宇曾川流域では、少し上流側の長野遺跡・なまず遺跡・杏掛遺跡（愛荘町）を中心に遺跡は展開する。これらの遺跡の近くには古代東山道に比定される近世中山道が通り、愛知郡衙の存在も想定されており、当該期の中心的役割をなした地域と考えられている。平安時代になると国領遺跡で前代に引き続き集落が営まれるが、普光寺廃寺や芝原遺跡でも遺構・遺物が確認されるようになる。特に、芝原遺跡では京都産縁釉陶器皿・畿内産黒色土器碗・灰釉陶器皿の転用硯がまとまって出土しており、一般集落とは異なる様相がみてとれる。

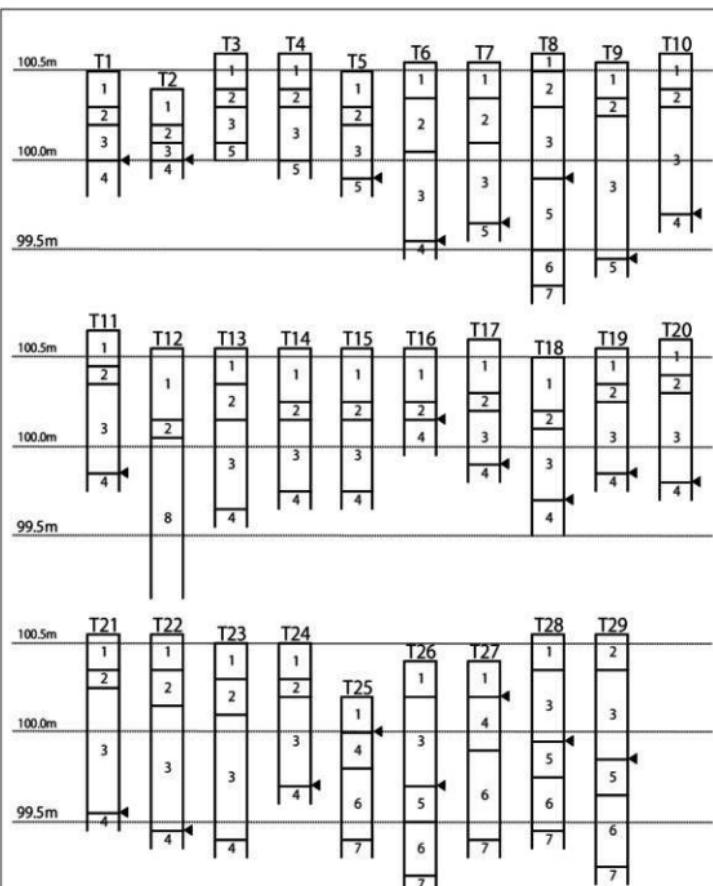
中世 中世では、平安時代から鎌倉時代にかけての集落が国領遺跡、普光寺廃寺遺跡、市遺跡で営まれる。また、湖上交通が活発化し、市域では松原・薩摩・柳川・三津屋・石寺・須越・八坂が営まれる。そのような中にあって、宇曾川流域に立地する妙楽寺遺跡では室町時代を中心とする遺構が検出され、15世紀末から16世紀後半には、条里地割に方位を揃える水路と道路によって整然と区画された屋敷地が検出されている。貿易陶磁や茶道具も多く出土し、琵琶湖と宇曾川の水運によって繁栄した商業を生業とする都市的空間であったと考えられている。この妙楽寺遺跡と宇曾川を隔てた対岸には古屋敷遺跡が位置する。道路や土塁で区画された屋敷地が確認され、存続時期が妙楽寺遺跡と一致することから、両遺跡は一体のものと捉えられている。しかし、妙楽寺遺跡が水路によって区画されているのに対し、古屋敷遺跡では、道路や土塁で区画されている点や古屋敷遺跡では妙楽寺遺跡に比べて茶器よりも、日常雑器の占める割合が高いなどの違いも認められる。

中世後半期では、北の京極・浅井氏と南の六角氏の軍事的衝突が活発化し、市域一帯は、ちょうど両勢力がぶつかり合う地理的関係上、佐和山城や肥田城などの城館が活発に営まれ、佐和山城に関してはその地理的・軍事的重要性より、その後も織田勢力・豊臣勢力へと引き継がれていく。

（3）道ノ下遺跡の概要と既往調査（図4、表2）



図5 試堀調査のトレンチ位置図



T1~T24

- | | | |
|-------------------|--------------|-----------|
| 1. 黄灰色粘質土（近現代耕作土） | 4. にぶい黄褐色粘質土 | 7. 黄褐色砂礫土 |
| 2. 黄褐色粘質土（耕作土床土） | 5. 黄褐色粘質土 | 8. 白灰色砂質土 |
| 3. 黑褐色粘質土 | 6. 褐色砂質土 | |

◀ : 造構限出面

T25~T29

- | | | |
|--------------|-----------|-----------|
| 1. 灰色粘質土（表土） | 4. 褐色粘質土 | 7. 黄褐色粘質土 |
| 2. 灰色碎石層 | 5. 灰色粘質土 | |
| 3. 黄褐色粘質土 | 6. 黑褐色粘質土 | |

図 6 試堀調査土層断面柱状図

道ノ下遺跡は、彦根市東沼波町に所在する古墳時代から中世にかけての遺跡である。鈴鹿山系から流れる芹川左岸の標高 100 m の扇状地の扇端部に立地している。遺跡周辺は、耕作地が広がっていたが、近年、宅地化や集合住宅建設などの開発が進んでいるが、開発に伴い過去に 1 度調査が実施されている。

« 1 次調査 »

道ノ下遺跡における初めての発掘調査である。平成 24 年度に個人住宅建設工事に伴い彦根市教育委員会によって実施された。調査地は遺跡の西部に位置する。平安時代の遺構が確認されている。検出された遺構は掘立柱建物 1 棟、複数の土坑や小穴などである。出土遺物は、須恵器である。

参考文献

- 滋賀県立安土城考古博物館 2006『扇状地の考古学』
彦根市 1960『彦根市史』上巻
彦根市 2002『彦根 明治の古地図』二
彦根市 2007『新修彦根市史』第 1 卷通史編 古代・中世
彦根市教育委員会 2014『平成 24 年度 彦根市内遺跡発掘調査報告書』彦根市教育委員会文化財調査報告書第 58 集
琵琶湖流域研究会 2003『琵琶湖流域を読む 上—多様な河川世界へのガイドブックー』

第2章 発掘調査の成果

第1節 基本土層（図7～12、写真2）

調査地は北西部の一部を除き、ほぼ全域が耕作地または休耕田としての土地利用がなされていた。基本層位としては、I～V層に分類できる。I層は黄灰色粘質土で、近現代の耕作土である。II層は黄褐色粘質土で、I層に伴う床土である。III層は黒褐色粘質土で7～8世紀代の遺物を含む包含層で、15～40cmの厚さで堆積している。IV層はにぶい黄褐色粘質土、V層は黄褐色粘質土でともに基盤層であり、IV層上面が遺構検出面となる。ただし、IV層は機能面と考えられ遺構判別が困難な地区もあったため、その際は適宜V層まで掘り下げるこにより遺構検出を行った。なお、遺構の埋土は黒褐色粘質土が多いが、III層の包含層との判別は極めて難しい。

地理的環境でも記述したが調査地周辺は、芹川の洪水の影響が予想された。今回の調査地では、当初の予想通り微高地はIV層からなる安定した地山を形成しており、微高地と微高地の間の低平地には網状の流れ（旧路路）が刻まれ砂礫が堆積している状況が複数確認された。

今回の調査地で検出した遺構面の標高は、調査区東端で約100.2m、西端で約99.2mを測り、東から西にわずかに地形が下がっている状況が読み取れる。



写真2 調査区第1区南東壁(A-A') 土層断面

第2節 検出遺構と遺物

（1）概要（図7）

今回の調査では、奈良時代～平安時代前期の集落関連遺構を検出した。主な検出遺構は竪穴建物2軒、掘立柱建物7棟、柵2条、複数の不定形土坑や小穴などで、遺構の広がりの中心はX = -83500～-83560、Y = 23520～23550の範囲であった。今回の調査は、宅地造成工事の道路と調整池部分のみの調査であり、複数の掘立柱建物等を確認したが、これらの建物群の分布の中心は掘立柱建物を検出した道路と道路に挟まれた宅地部分に広がると推定される。

（2）包含層・遺構面精査時出土遺物（図13・14）

基本層序でも触れたが、調査区全域で黒褐色粘質土（III層）の遺物包含層の広がりを確認した。

包含層出土遺物は、土師器（1～5）、須恵器（6～15）、瓦（16・17）である。

1・2は土師器の壺の口縁部である。1は口径13.0cm、残存器高3.0cmを測る。まっすぐ立ち上がる口縁部を持つ。3は土師器の壺の口縁部で、口径24.0cmを測る。やや受口状を呈する口縁部である。4は土師器の壺で口径15.6cm、残存器高7.5cm、残存部の体部最大径は17.2cmを測る。球形の体部を持つものとみられ、短く外反して開く口縁部が取り付く。口縁部は端部に向けて器壁が薄くなり、端部には外傾する狭い面を有す。体部外面には縱方向のハケメを、体部内面には縱方向のケズリを施す。5は土師器の鍋の口縁部である。口径36.0cm、口縁部径42.0cm、残存器高3.9cmを測る。体部から大きく屈曲して直線的に開く口縁部である。口縁端部は外側に面を有する。外面には煤が付着しており、内面にはハケメを施す。

6～8は須恵器の壺蓋である。6は口径12.1cm、器高3.7cmを測る。天井部が丸みを持つもので、ヘラ切り後ロクロナデが施される。7は口径17.4cm、残存器高3.0cmを測る。失われているが、天井部に宝珠つまみを持つと思われる。口縁部は内側に低いかえりを持つ。かえりの端部は口縁端部よりも上位に納まる。8は口径12.0cm、残存器高1.0cmを測る。失われているが、天井部に宝珠つまみを持つと思われる。口縁端部は下方に小さく折り曲げ、外側に垂直な面を持つ。9～13は須恵器の壺身である。9は口径12.2cm、器高3.7cmを測る。平らな底部から内湾気味に体部が立ち上がり、口縁部はやや外反する。内外面とも磨滅が激しい。11は底径6.8cm、残存器高3.7cmを測る。12は底径13.8cm 器高4.5cmを測る。13は底径14.7cm、器高4.4cmを測る。12・13とも直線的に開く体部及び口縁部を持つが、12は高台が低く外側に開くが、13は比較的高台が高い。14・15は鉢と推定される。16・17は平瓦である。いずれも磨滅が激しいが17はわずかに布目が確認される。

包含層出土遺物の時期幅はおおむね7世紀～8世紀と考えられる。

遺構面精査時出土遺物は、土師器(18～20)、須恵器(21・22)である。

18・19は土師器の壺の口縁部である。18は口径24.0cmを測る。やや受口状を呈する口縁部である。19は口径24.1cm、残存器高6.9cmを測る。口縁部は内湾気味に開く受口状を呈し、口縁端部はやや内傾する面を持つ。体部内外面とも斜め方向のハケメを施す。20は土師器の鍋の口縁部である。大きく屈曲してほぼ水平に開く口縁部で、口縁端部には内傾する面を有す。21は須恵器の壺身の口縁部である。22は平瓦である。

遺構面精査時出土遺物に関しても、遺物量が少ないという点は考慮にいれる必要があるが、包含層出土遺物同様、概ね7世紀～8世紀の時期幅に納まると考える。

(3) 自然流路 (NR74・NR79・NR80・NR314・NR356・NR362・NR563・NR565・NR586)

複数の自然流路を確認した。いずれも概ね東西方向を向いており、検出高は東端で約100.0m、西端で約99.2mを測り、傾斜に沿って東から西に向かって流れる。各自然流路から出土遺物がなかったため、埋没時期などは不明である。ただ、NR362は上面でSB7やSX336を検出しているため、SB7やSX336構築以前の堆積である。また、重機掘削の際、遺物包

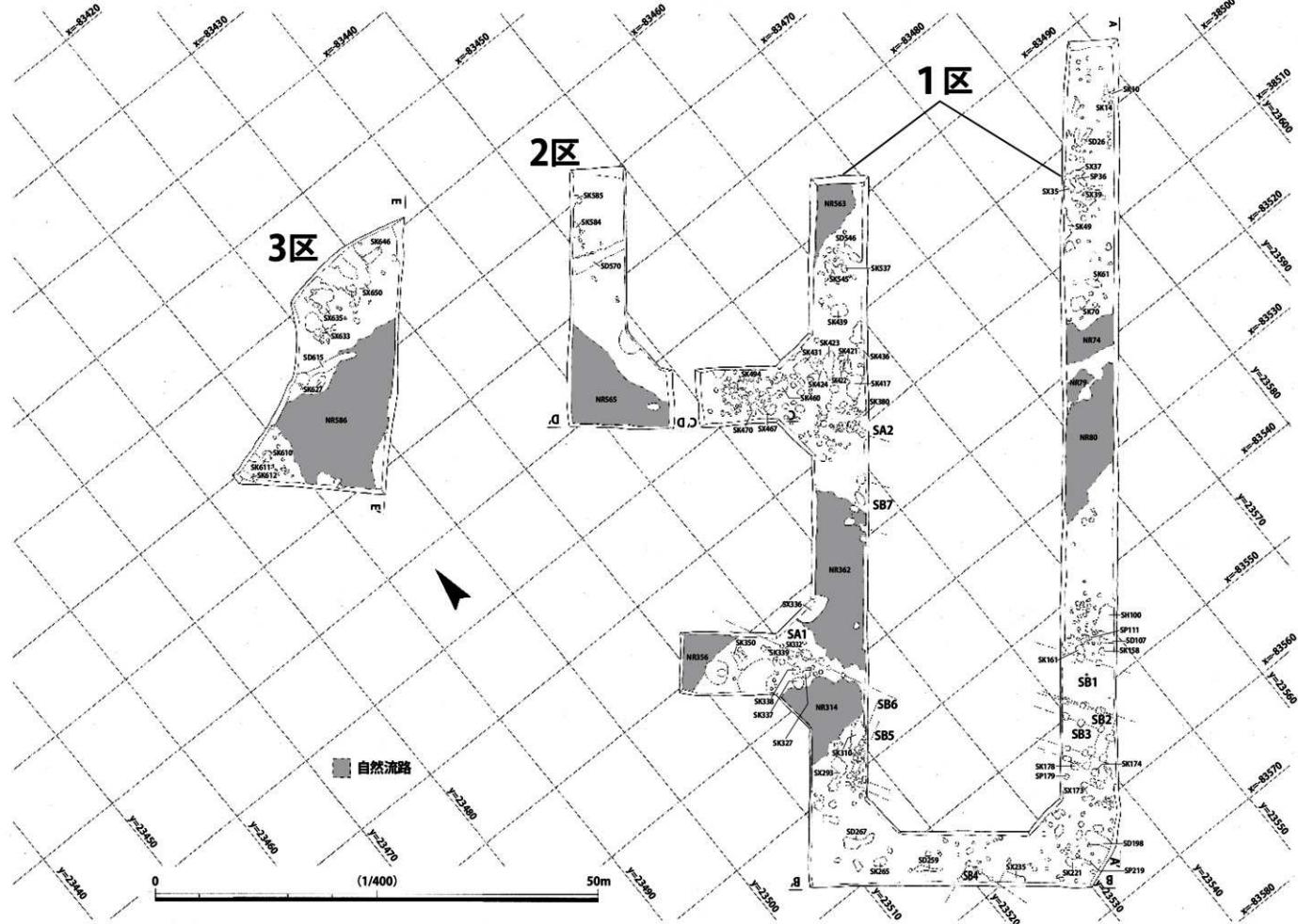


図7 調査区遺構全図

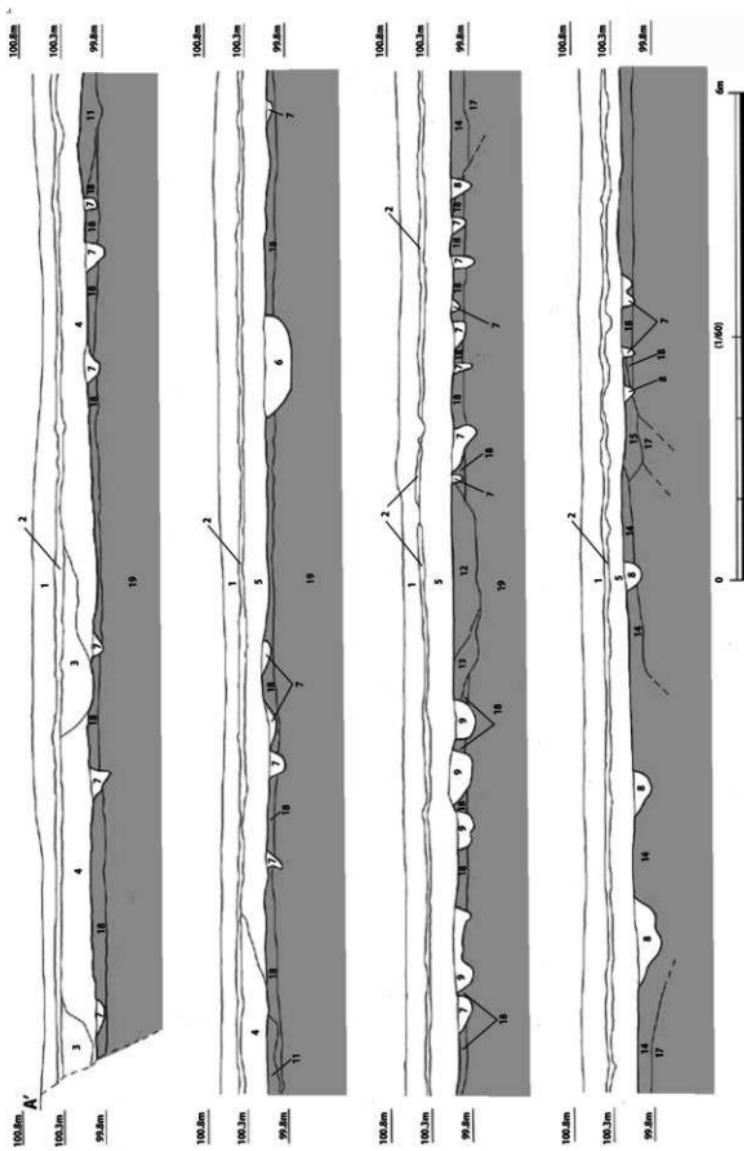


图 8 调查区第 1 区南渠壁 (A-A') 土层断面图 (1)

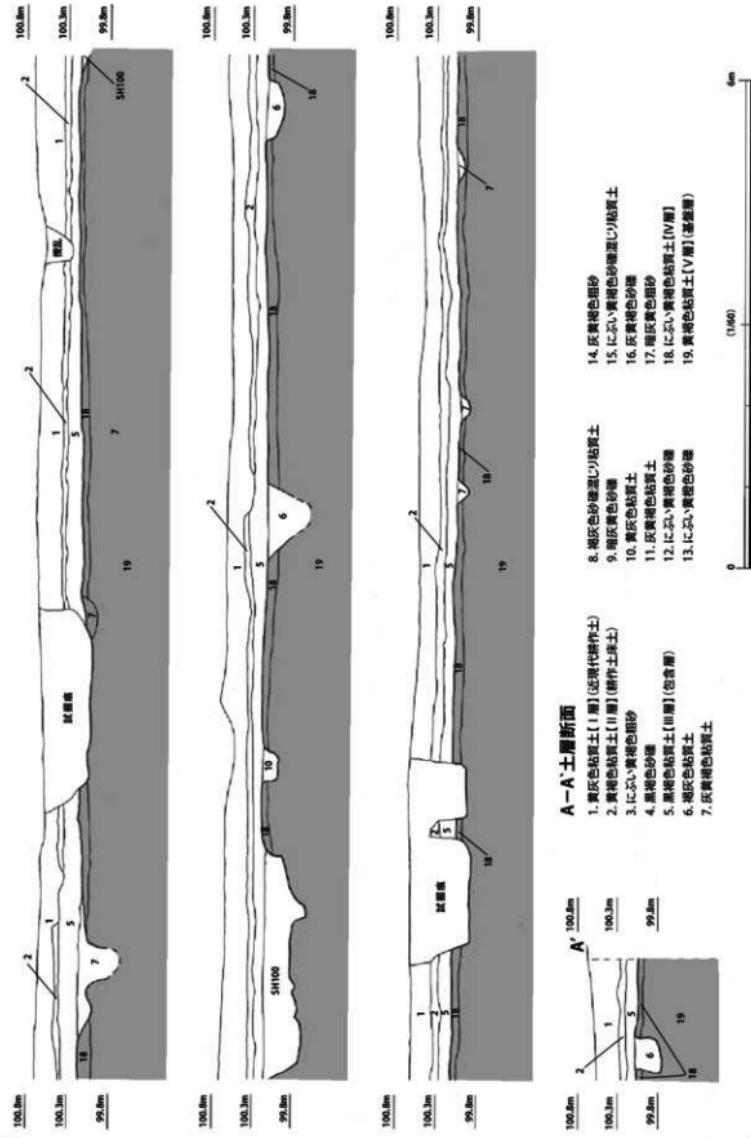


図9 調査区第1区南東壁 (A-A') 土層断面図(2)

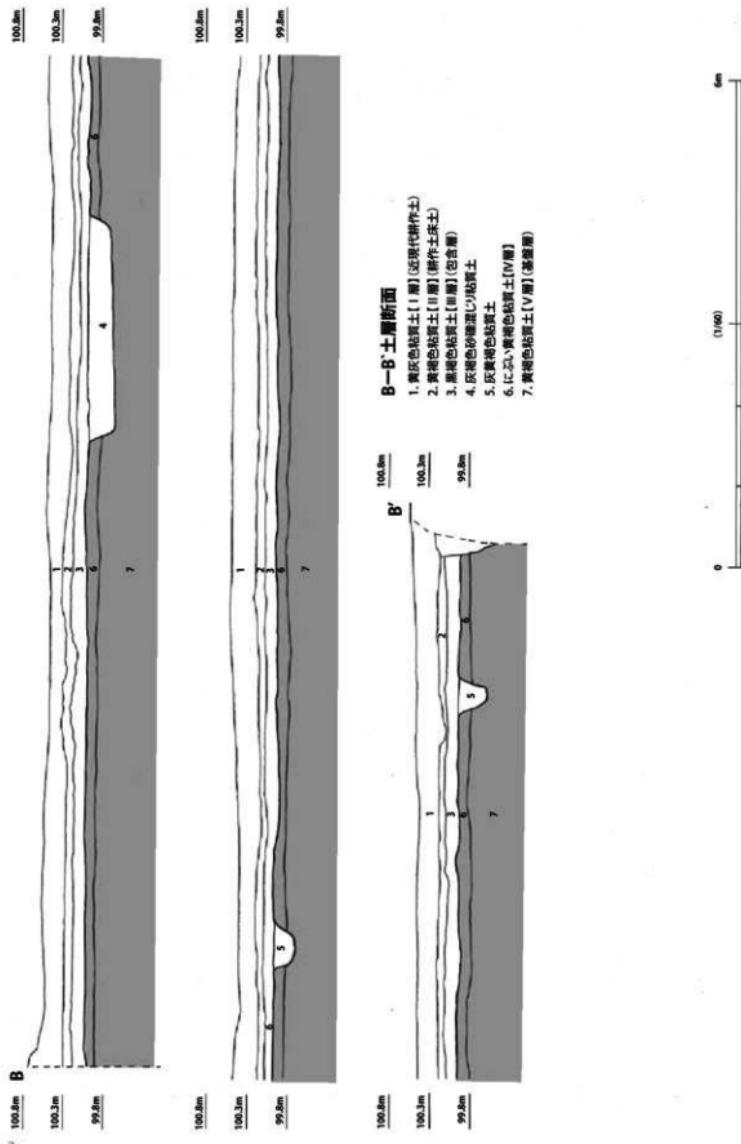


图 10 制造区第 1 区胸西壁 (B-B') 剖面示意图

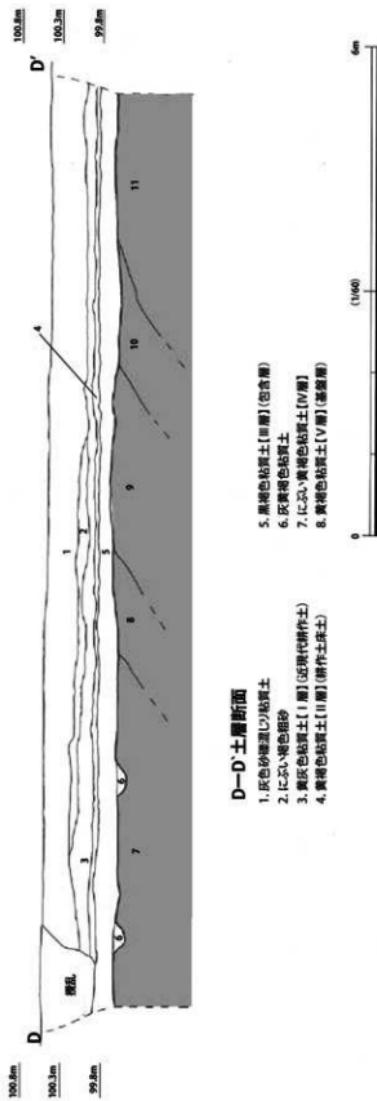
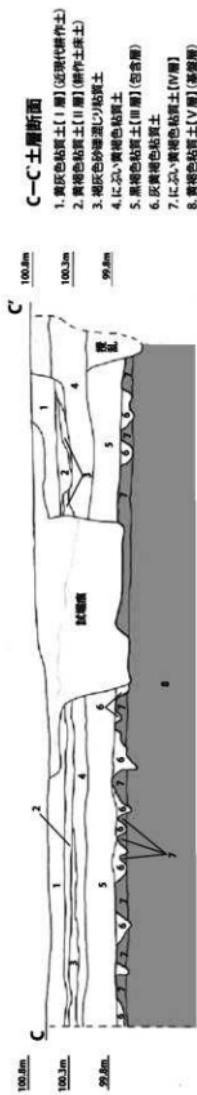


図 11 調査区第 1 区前西壁 (C-C')・第 2 区南西壁土壌断面図

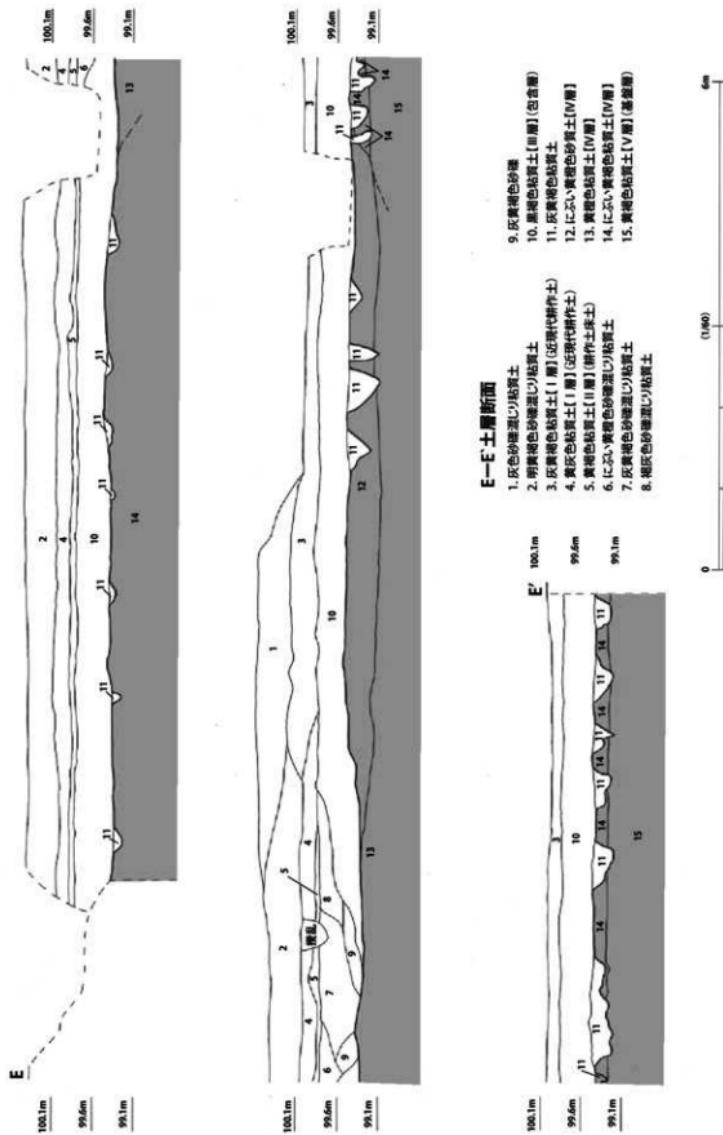


図 12 調査区第3区前東壁 (E-E') 土層断面図

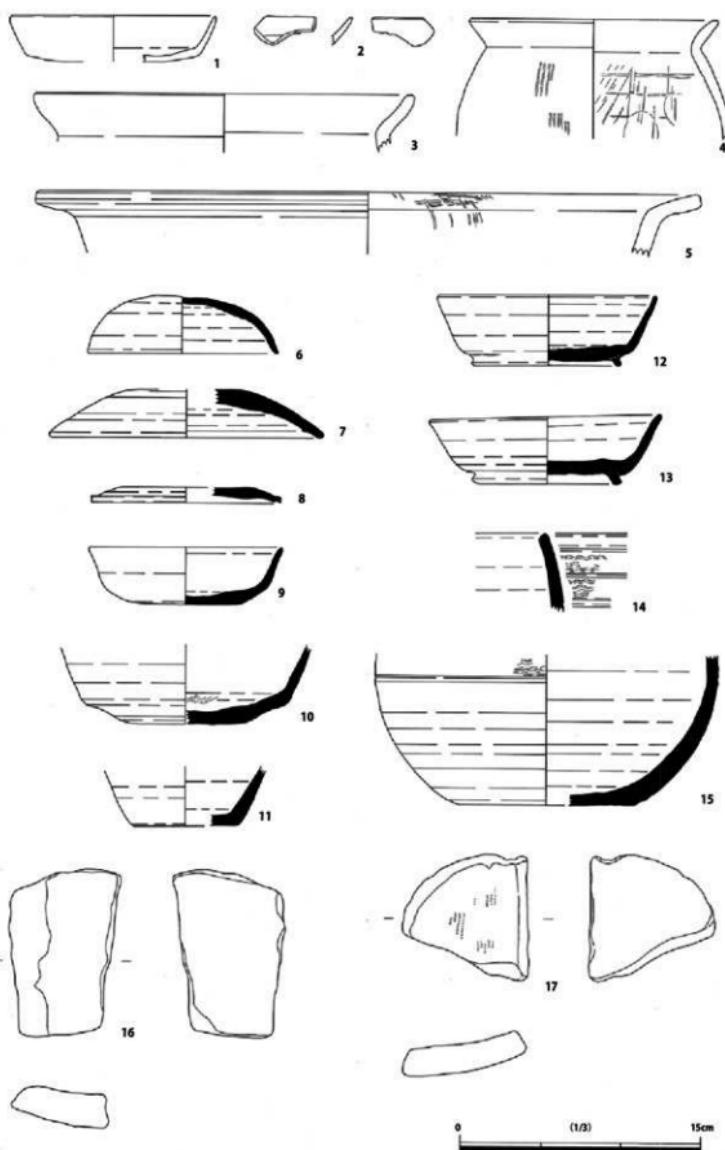


图 13 包含层出土遗物实测图

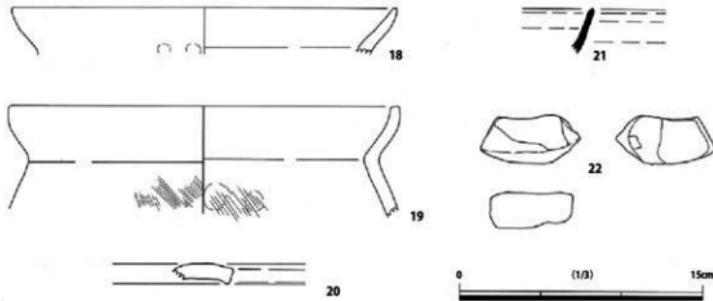


図14 遺構面精査時出土遺物実測図

含層であるIII層上面でも同様の東西方向の自然流路を複数確認しており、調査区A-A'断面の3・4層がそれに対応する。このように、今回の調査区では、東西方向の自然流路が複数時期・複数本確認できた。これらは、芹川の洪水等の影響で形成されたものと推測され、調査地周辺が断続的に芹川の影響をうける地理的環境であったことを物語っている。

(4) 竪穴建物 (SH100・SH235)

SH100 (図15～18、表3)

調査区第1区の南側で検出された竪穴建物である。調査区端にかかっているため、概ね平面プラン半分ほどの検出となった。検出高は約100.2mで周辺の地形より若干微高地状に高まっている安定した地山上に構築されていた。平面形は隅丸方形で残存部の1辺は約2.9m、深さは約0.43mを測る。建物の主軸はおよそN-32°Wの方位をとる。竪穴外周辺には垂木など建物に関連する遺構は確認されなかった。竪穴内部については、2箇所で主柱穴を確認している。その主柱穴の平面形は円形で直径約0.26～0.35m、深さは約0.20～0.25m、柱間は約1.85mを測る。床面東部には調査区端にかかる位置で扁平な石が据えられており、周囲の埋土の炭化物の含有比率が極めて高いため、調査区外にカマドないし炉跡が存在する可能性が推測される。石材の西側には、断面皿状の窓みが、南北側には溝が穿たれている。床面の貼土、壁際溝は確認されなかった。

竪穴内の埋土は、1層（上層）：褐灰色砂礫混じり粘質土、2層（下層）：黒褐色粘質土の2層に分けられる。遺物に関しては、1層と2層にわけて取り上げを行った。

1層の出土遺物は、土師器（23）と須恵器（24～26）である。

23は土師器の壺の口縁部である。口縁部は内湾気味に開く受口状を呈し、口縁端部はやや内傾する面を持つ。24・25は須恵器の壺蓋である。25はS字状の口縁端部を持つ。26は須恵器の壺身である。口径8.2cm、残存高3.0cmを測る。口縁部はまっすぐ立ち上がる。

下層（2層）の出土遺物は、土師器（27～34）と鉄製品（35）、小片で図化はできなかつたが須恵器も確認されている。

27・28は土師器の壺である。27は口径12.0cm、残存高2.5cmを測る。内湾気味に開

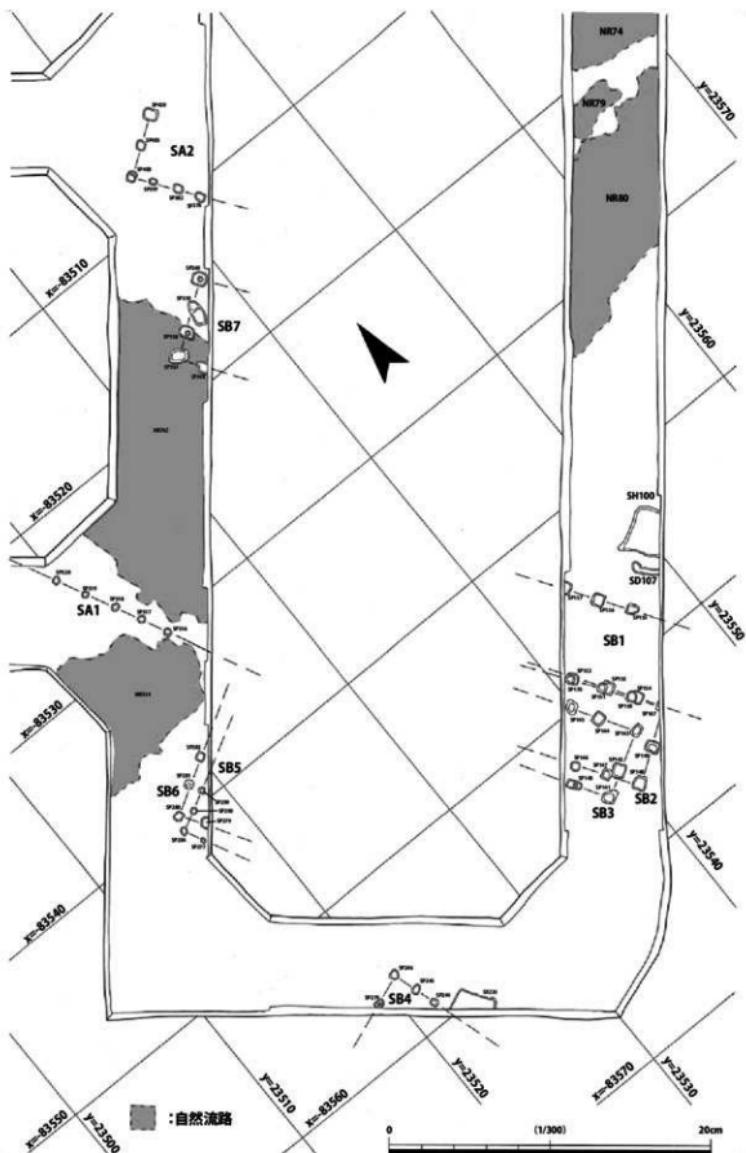


図 15 調査区第1区建物群平面図



写真3 調査区第1区建物群（垂直写真）

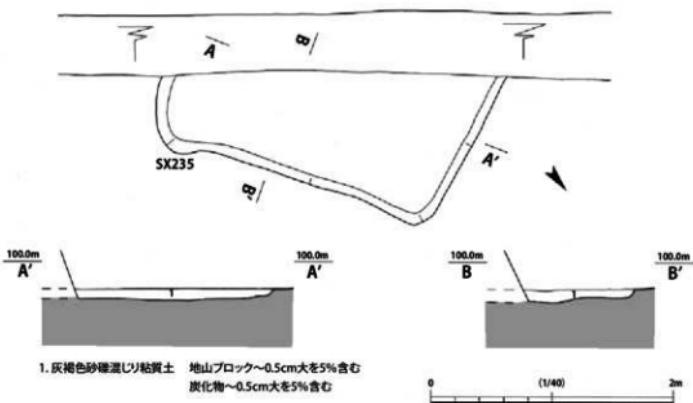
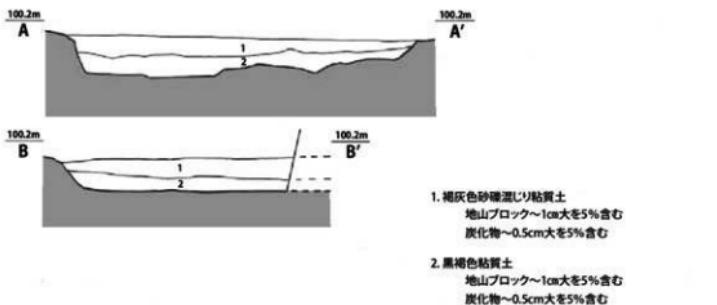
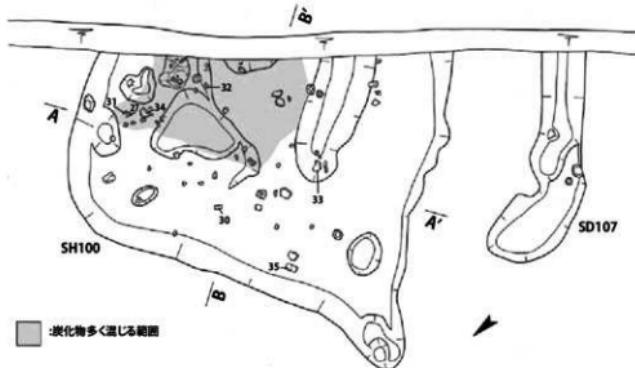


図 16 穴掘建物 (SH100・SH235) 平面図・断面図

く口縁部を持つ。29～34は土師器の甌である。30は、直線的に開く口縁部で、端部には内傾する面を持ち、沈線が1条巡る。31は、直線的に開く口縁部で、端部には内傾する面を持つ。32は受口状を呈する口縁部である。33は口径11.8cm、残存器高8.6cmを測る。直線的に開く口縁部を持つ。34は口径12.8cm、残存器高7.2cmを測る。球形の体部を持つものとみられ、短く外反して開く口縁部が取り付く。口縁部は端部に向けて器壁が薄くなり、端部には外傾する狭い面を有す。体部外面上半部には斜め方向のハケメを、体部内面には横方向と斜め方向のハケメを施す。35は薄い板状の金属製品である。縦6.0cm、横7.8cm、厚さ0.4cmを測る。目視での観察であるが、表面は平滑な面を呈す。裏面は、4隅に鉢状の突起が確認でき、その突起の断面形は方形を呈す。中央には、推定で縦0.9cm、横1.7cmほど

【上層】



【下層】

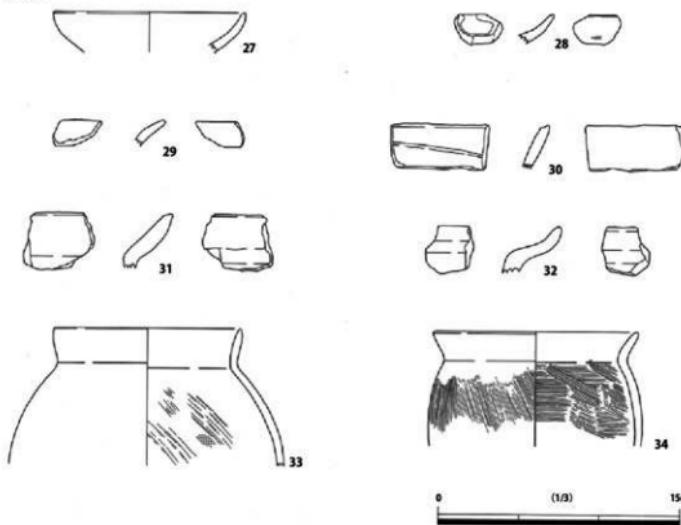


図17 SH100出土遺物実測図(1)

の平面橢円形の穿孔が穿たれており、その穿孔の左右にも各1箇所づつ紙状の突起が確認できる。そして、裏面全体に木目の模様が確認できる。以上の観察状況より、この金属製品は、何らかの木製品（材）に取り付けられていた金具と推定される。金属製品裏面が木材との設置面（固定面）と考えられ、時間をかけて木材が腐っていく過程のなかで金属製品の銷も進行し、木目が転写される形で木目模様が残ったと推定される。また、紙状の突起は、木材と金属製品を固定していた紙と考えられ、木材が失われたことにより突起だけが残ったと推定される。

SH100の時期は、出土遺物の大半が7世紀後半から8世紀前半を中心とすることより概ね当該期と考えられる。しかし、1層（上層）で1点だけ8世紀後半と思われる遺物が確認されている。資料が1点で小片であり、また1層（上層）からの出土ということより、混入の可能性も否定できないが、現段階では、当該遺構の時期は幅を持たせて7世紀後半～8世紀代と考えておきたい。

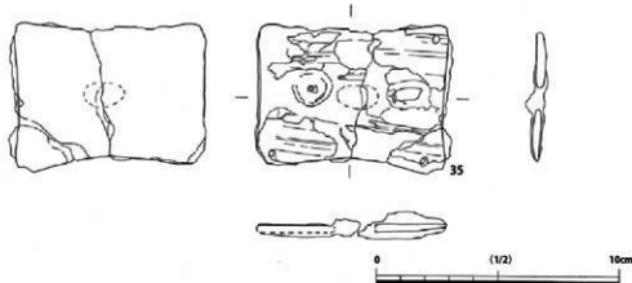


図18 SH100出土遺物実測図（2）

SH235（図16）

調査区第1区の南西側で検出された平面隅丸方形の竪穴建物である。調査区端にかかっているため、概ね平面プラン半分ほどの検出となつたが検出部の最大幅は約2.56mを測る。深さは約0.11mを測り非常に浅い。平面プランの主軸はおよそN-30°-Wの方位をとる。竪穴内部にも外部にも主柱穴が確認されない。埋土は灰褐色砂礫混じり粘質土の1層である。

出土遺物がないため、時期を比定し得ないが、SH100と主軸方位が同じため、SH100と同時期または極めて近い時期と推定される。

表3 竪穴建物一覧

建物	平面形状	長辺×短辺(m)	深さ(m)	床面積(m ²)	主軸方位	出土遺物	掲図	写真 図版
SH100	隅丸長方形	2.90×2.35(以上)	0.43	6.82(以上)	N-32°-W	土師器(23-27~34)、須恵器(24~26)、金属製品(35)	16~18	3-5
SH235	隅丸長方形	2.56×1.45(以上)	0.12	3.71(以上)	N-30°-W		16	

(5) 挖立柱建物 (SB1・SB2・SB3・SB4・SB5・SB6・SB7)

SB1 (図 19・22、表 4・5)

調査区第1区の南側で検出された掘立柱建物である。検出高は約 100.1 m で周辺の地形より若干微高地状に高まっている安定した地山上に構築されていた。SB2 と重なりあう位置にあるが、柱穴の切り合い関係より SB1 廃絶後に SB2 が構築されている。今回の調査では、調査区端にかかる形で検出されたため、建物全体のプランは判明しなかったが、検出できている範囲では梁行 2 間（約 5.20 m）× 衍行 3 間（約 6.20 m）以上で、建物面積は約 32.24 m² 以上の規模を持ち、建物の主軸はおよそ N - 33° - W の方位をとる。柱間は梁行で約 2.60 m、衍行で約 1.93 ~ 2.30 m を測る。柱穴は、SP152・SP153・SP154・SP155・SP156・SP157 で構成され、掘り方の平面形は隅丸方形で 1 辺は約 0.62 ~ 0.83 m、深さは約 0.25 ~ 0.55 m を測る。柱痕は、平面円形で直径は約 0.26 ~ 0.28 m を測る。

遺物は、SP152 から小片のため図化していないが土師器と須恵器が、SP154 から土師器 (36・37) が出土した。

36・37 は土師器の壺である。36 は口径 15.6 cm、残存器高 3.6 cm を測る。体部は、やや内湾気味に開く。器表の内外面に赤褐色の顔料を塗布している。37 にも赤褐色の顔料は塗布されている。

SB1 の時期は、出土遺物より 7 世紀後半～8 世紀前半と考えられる。

SB2 (図 20・22、表 4・5)

調査区第1区の南側で検出された掘立柱建物である。検出高は約 100.1 m で周辺の地形より若干微高地状に高まっている安定した地山上に構築されていた。SB1・SB3 と重なりあう位置にあるが、柱穴の切り合い関係より SB1 廃絶後に SB2 が構築され、SB2 廃絶後に SB3 が構築されている。今回の調査では、調査区端にかかる形で検出されたため、建物全体のプランは判明しなかったが、検出できている範囲では梁行 2 間（約 5.00 m）× 衍行 3 間（約 6.00 m）以上で、建物面積は約 30.00 m² 以上の規模を持ち、建物の主軸はおよそ N - 34° - W の方位をとる。柱間は梁行で約 2.40 ~ 2.60 m、衍行で約 1.86 ~ 2.22 m を測る。柱穴は、SP146・SP147・SP148・SP149・SP150・SP151・SP167・SP170 で構成され、掘り方の平面形は隅丸方形で 1 辺は約 0.57 ~ 0.88 m、深さは約 0.14 ~ 0.54 m を測る。柱痕は、平面円形で直径約 0.40 ~ 0.46 m を測る。建物の角部分の柱穴である SP148 は他柱穴より深く、底部には直径 3 ~ 5 cm の礫が比較的多く確認された。

遺物は、SP147 から須恵器 (41) が、SP150 から土師器 (38) と須恵器 (39) が、SP151 から須恵器 (40) が、SP170 から土師器 (43) がそれぞれ出土している。SP151 からは小片のため図化していないが土師器も出土した。

38 は土師器の壺である。口径は 15.0 cm、器高は 3.7 cm を測る。体部は、やや内湾気味に開く。器表の内外面に赤褐色の顔料を塗布している。39 は須恵器の壺蓋である。口縁部は内側に低いかえりを持つものと思われるがかえりは欠損している。40 は須恵器の壺蓋、41 は須恵

器の皿である。口径は21.0cm、残存器高は1.8cmを測る。42は土師器の瓶と推測される。

SB2の時期は、出土遺物より7世紀後半～8世紀前半と考えられる。

SB3（図21・22、表4-5）

調査区第1区の南側で検出された掘立柱建物である。検出高は約100.1mで周辺の地形より若干微高地状に高まっている安定した地山上に構築されていた。SB2と重なりあう位置にあるが、柱穴の切り合い関係よりSB2廃絶後にSB3が構築されている。今回の調査では、調査区端にかかる形で検出されたため、建物全体のプランは判明しなかつたが、検出できている範囲では梁行2間（約4.40m）×桁行3間（約4.30m）以上、建物面積は約18.92m²以上の規模を持ち、建物の主軸はおよそN-32°-Wの方位をとる。柱間は梁行で約1.75～2.65m、桁行で約1.86～2.40mを測る。柱穴は、SP140・SP141・SP142・SP143・SP144・SP145で構成され、掘り方の平面形は隅丸方形で1辺は約0.56～0.95m、深さは約0.25～0.62mを測る。柱痕は、平面円形で直径は約0.28～0.38mを測る。建物の角部分の柱穴であるSP141とSP143は他柱穴より深く、底部には直径3～5cmの礫が比較的多く確認された。

遺物は、SP142から小片のため図化していないが土師器が、SP143から丸瓦（43）がそれぞれ出土した。

時期を特定できる遺物の出土がないため、遺物からの時期を比定し得ないが、SB1・SB2と建物の主軸方位が同じため、概ね近い時期と推定される。

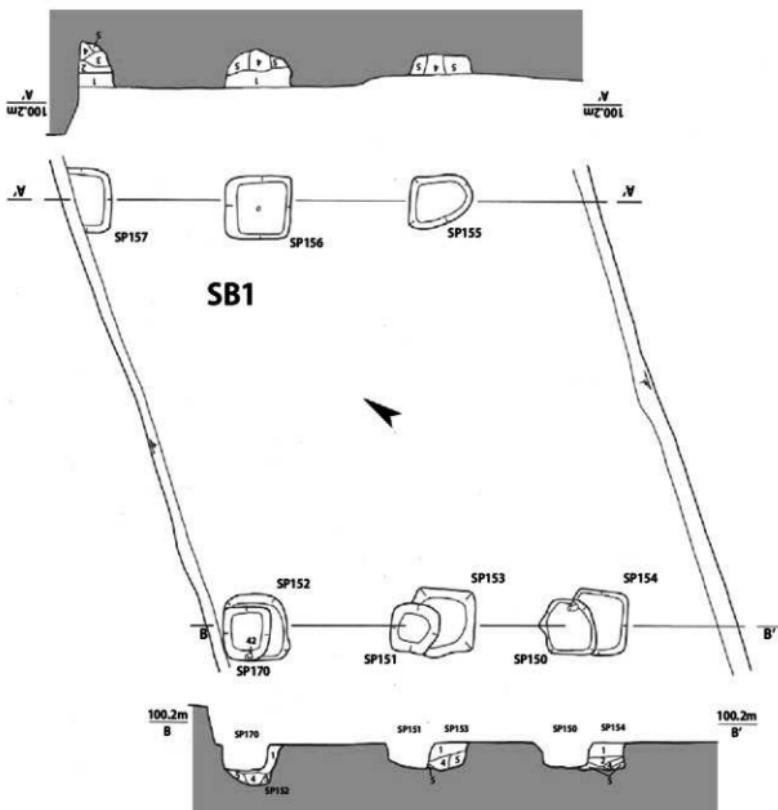
SB4（図23、表4-5）

調査区第1区の南西側で検出された掘立柱建物である。今回の調査では、調査区端にかかる形で検出されたため、建物全体のプランは判明しなかつたが、検出できている範囲では梁行1間（約2.00m）以上×桁行2間（約3.00m）以上、建物面積約6.00m²以上の規模を持ち、建物の主軸はおよそN-16°-Wの方位をとる。柱間は梁行約2.00m、桁行約1.40～1.60mを測る。柱穴は、SP244・SP245・SP246・SP247で構成され、掘り方の平面形は円形・楕円形・隅丸方形が混在しており、1辺（直径）は約0.48～0.67m、深さは約0.16～0.36mを測る。柱痕は、SP247でのみ確認されており、平面円形で直径は約0.30mを測る。

出土遺物がないため、時期を比定し得ない。また、SB1・SB2・SB3と主軸方位が異なるため、これら3棟の建物と異なる時期の可能性が考えられる。

SB5（図23、表4-5）

調査区第1区の南西側で検出された掘立柱建物である。SB6と重なりあう形で検出されたが、柱穴の切り合い関係はないため、建物の前後関係は不明である。今回の調査では、調査区端にかかる形で検出されたため、建物全体のプランは判明しなかつたが、検出できている範囲では梁行2間（約2.80m）以上×桁行1間（約1.30m）以上、建物面積約3.64m²以上の規模を持ち、建物の主軸はおよそN-24°-Wの方位をとる。柱間は梁行で約1.40m、桁行で約1.30mを測る。柱穴は、SP277・SP284・SP290・SP299で構成され、掘り方の平面形は円形・隅丸方形・不整形が混在しており、1辺（直径）は約0.32～0.48m、深さ



1. 暗褐色粘質土 地山ブロック～2cm大を15%含む
炭化物～0.5cm大を5%含む
2. 灰黃褐色粘質土 地山ブロック～3cm大を25%含む
炭化物～0.5cm大を5%含む
3. 褐灰色粘質土 地山ブロック～1cm大を10%含む
炭化物～0.5cm大を5%含む
4. 黒褐色粘質土 地山ブロック～1cm大を7%含む
炭化物～0.5cm大を5%含む
5. にぶい黄褐色粘質土 地山ブロック～5cm大を40%含む
炭化物～0.5cm大を5%含む

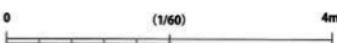


図 19 掘立柱建物 (SB1) 平面図・断面図

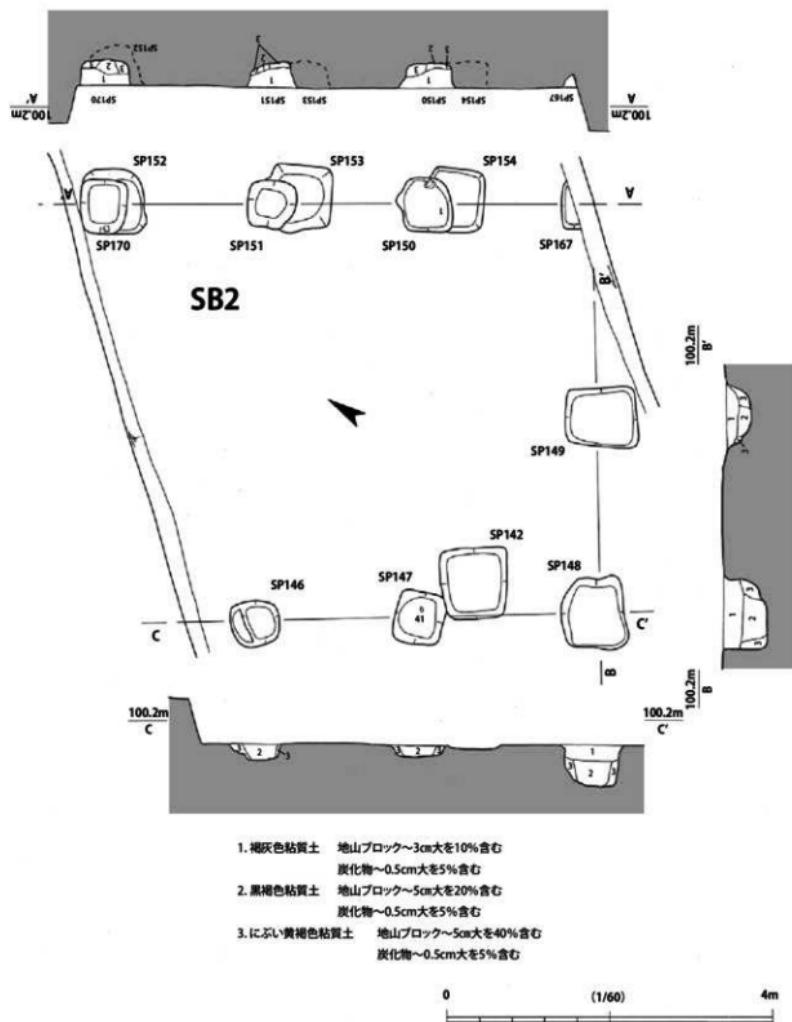


図20 掘立柱建物(SB2) 平面図・断面図

は約 0.09 ~ 0.19 m を測る。

出土遺物がないため、時期を比定し得ない。また、SB1・SB2・SB3 と主軸方位が異なるため、これら 3 棟の建物と異なる時期の可能性が考えられる。

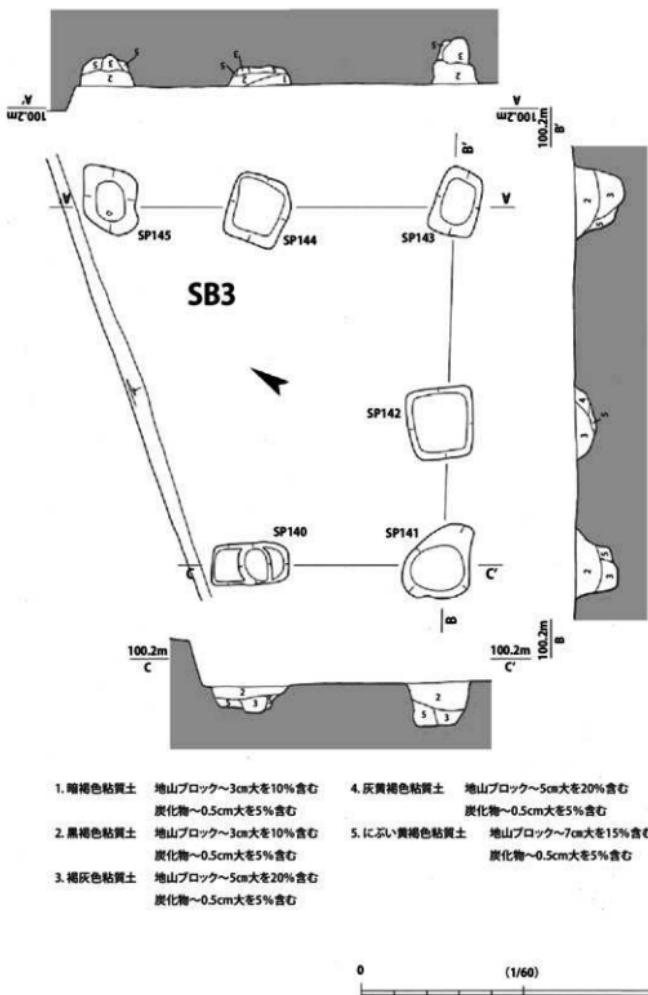


図 21 掘立柱建物 (SB3) 平面図・断面図

SB6 (図 23、表 4-5)

調査区第1区の南西側で検出された掘立柱建物である。SB5と重なりあう形で検出されたが、柱穴の切り合い関係はないため、建物の前後関係は不明である。今回の調査では、調査区端にかかる形で検出されたため、建物全体のプランは判明しなかったが、検出できてい

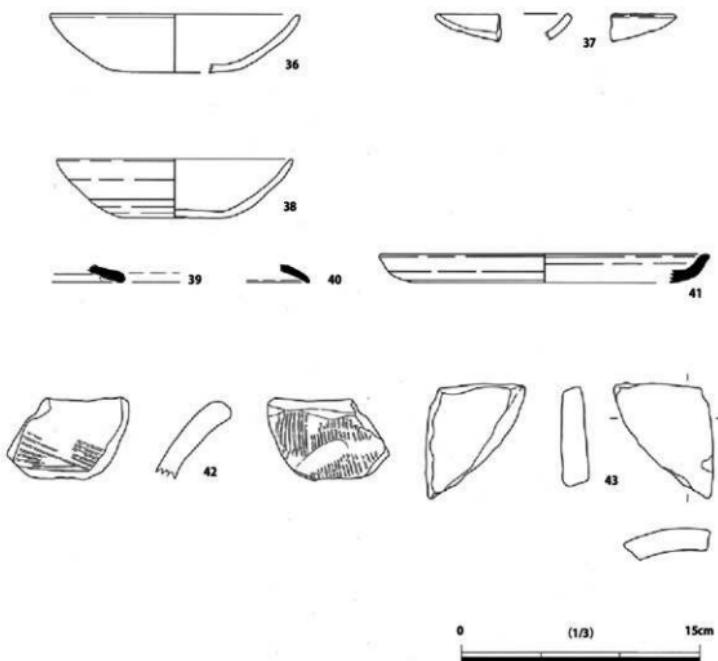


図 22 SB1・SB2・SB3 柱穴出土遺物実測図

る範囲では梁行 2 間（約 3.90 m）以上 × 桁行 1 間（約 1.80 m）以上、建物面積約 7.02m² 以上の規模を持ち、建物の主軸はおよそ N – 30° – W の方位をとる。柱間は梁行で約 1.85 ~ 2.05 m、桁行で約 1.80 m を測る。柱穴は、SP279・SP280・SP281・SP282 で構成され、掘り方の平面形は円形・隅丸方形が混在しており、1 辺（直径）は約 0.55 ~ 0.75 m、深さは約 0.11 ~ 0.20 m を測る。

出土遺物がないため、時期を比定し得ないが、SB1・SB2・SB3 と主軸方位が同じため、これら 3 棟の建物と同時期または極めて近い時期と推定される。

SB7（図 24、表 4・5）

調査区第 1 区の西側で検出された掘立柱建物である。自然流路 NR362 上面で検出した。今回の調査では、調査区端にかかる形で検出されたため、建物全体のプランは判明しなかつたが、検出できている範囲では梁行 3 間（約 5.00 m）以上 × 桁行 1 間（約 1.90 m）以上、建物面積約 9.50m² 以上の規模を持ち、建物の主軸はおよそ N – 32° – W の方位をとる。柱間は梁行で約 1.59 ~ 1.80 m、桁行で約 1.90 m を測る。柱穴は、SP357・SP358・

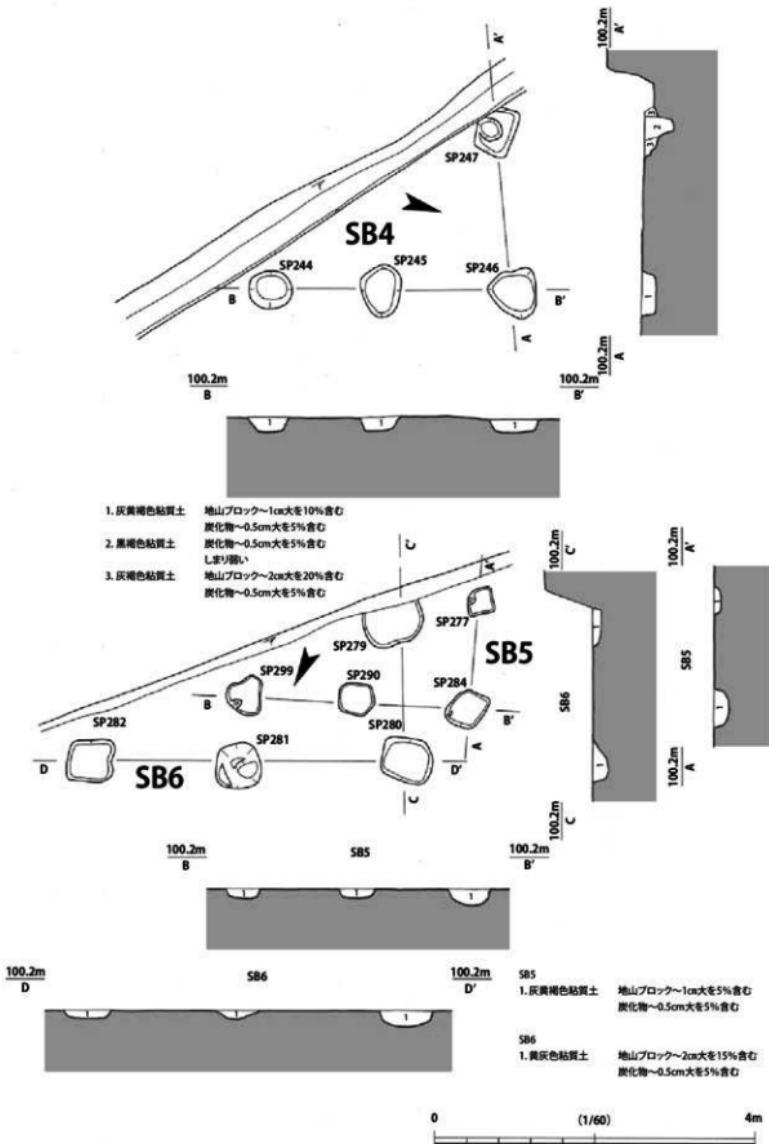


図 23 据立柱建物 (SB4・SB5・SB6) 平面図・断面図

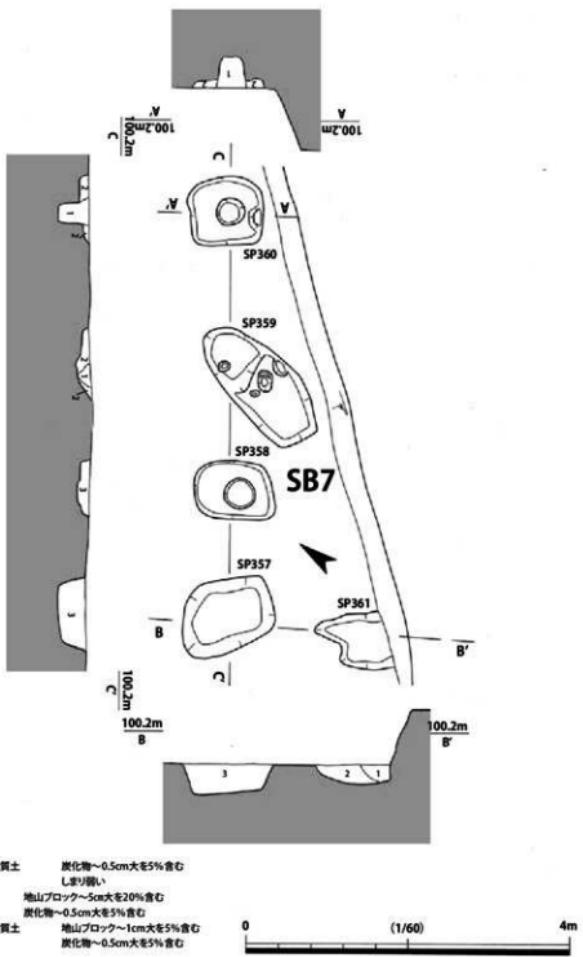


図 24 掘立柱建物 (SB7) 平面図・断面図

SP359・SP360・SP361 で構成され、掘り方の平面形は円形・隅丸方形が混在しており、1辺（直径）は約 0.72 ～ 1.11 m、深さは約 0.17 ～ 0.39 m を測る。

出土遺物がないため、時期を比定し得ないが、SB1・SB2・SB3 と主軸方位が同じため、これら 3 棟の建物と同時期または極めて近い時期と推定される。

表4 挖立柱建物一覧

建物	棟行×桁行(間)	棟行長(m)	桁行長(m)	床面積(㎡)	主軸方位	構図	写真図版
SB1	2×3(以上)	5.20	6.20(以上)	32.24(以上)	N-33°-W	19	5・6
SB2	2×3(以上)	5.00	6.00(以上)	30.00(以上)	N-34°-W	20	5・6
SB3	2×2(以上)	4.40	4.30	18.92	N-32°-W	21	5・6
SB4	1(以上)×2(以上)	2.00(以上)	3.00(以上)	6.00(以上)	N-16°-W	23	10
SB5	2(以上)×1(以上)	2.80(以上)	1.30(以上)	3.64(以上)	N-30°-W	23	10
SB6	2(以上)×1(以上)	3.90(以上)	1.80(以上)	7.02(以上)	N-24°-W	23	10
SB7	3(以上)×1(以上)	5.00(以上)	1.90(以上)	9.50(以上)	N-32°-W	24	10

表5 挖立柱建物・樋柱穴一覧

建物	清標	平地形	規模(m)			出土清物	備考	構図	写真図版
			長さ(最幅)	幅(第幅)	深さ				
SB1	SP152	圓丸方	0.78	0.78	0.50	土師器、須恵器	SP170に切られている。	19	7
	SP153	圓丸方	0.83	0.80	0.36		SP151に切られている。	19	7
	SP154	圓丸方	0.79	0.67	0.34	土師器(36-37)	SP150に切られている。	19	7
	SP155	圓丸方	0.77	0.62	0.25			19	7
	SP156	圓丸方	0.81	0.78	0.46			19	7
	SP157	圓丸方	(0.46)	0.78	0.55			19	7
SB2	SP146	圓丸方	0.60	0.58	0.22			20	7
	SP147	圓丸方	0.63	0.60	0.14	須恵器(41)	SP142に切られている。	20	8
	SP148	圓丸方	0.83	0.77	0.54		底部に3~5cmの大いな小破が目立つ。	20	7
	SP149	圓丸方	0.88	0.73	0.32			20	8
	SP150	圓丸方	0.68	0.65	0.32	土師器(38)、須恵器(39)	SP154を切っている。	20	8
	SP151	圓丸方	0.58	0.58	0.33	土師器、須恵器(40)	SP153を切っている。	20	9
SB3	SP167	圓丸方	(0.55)	(0.20)	(0.16)			20	
	SP170	圓丸方	0.65	0.57	0.32	土師器(42)	SP152を切っている。	20	8
	SP140	圓丸長方	0.95	0.57	0.32			21	9
	SP141	圓丸方	0.88	0.80	0.53		底部に3~5cmの大いな小破が目立つ。	21	9
	SP142	圓丸方	0.88	0.83	0.25	土師器	SP147を切っている。	21	9
	SP143	圓丸長方	0.82	0.56	0.62	瓦(43)	底部に3~5cmの大いな小破が目立つ。	21	9
SB4	SP144	圓丸方	0.82	0.75	0.25			21	9
	SP145	圓丸方	0.75	0.65	0.31			21	9
	SP244	円	0.54	0.48	0.18			23	
	SP245	楕円	0.67	0.52	0.16			23	
	SP246	円	0.63	0.61	0.18			23	
	SP247	圓丸方	0.61	0.48	0.36			23	
SB5	SP277	圓丸方	0.33	0.32	0.09			23	
	SP284	圓丸方	0.47	0.43	0.19			23	
	SP290	円	0.45	0.39	0.12			23	
	SP299	不規	0.48	0.44	0.12		SP300を切っている。	23	
	SP279	円	0.75	(0.54)	0.11			23	
	SP280	圓丸方	0.65	0.56	0.20			23	
SB6	SP281	円	0.57	0.57	0.11			23	
	SP282	圓丸方	0.55	(0.51)	0.11		SK310に切られている。	23	
	SP357	圓丸長方	1.11	0.94	0.38			24	
	SP358	圓丸長方	0.98	0.73	0.17			24	
	SP359	楕円	1.75	0.79	0.19			24	
	SP360	圓丸方	0.89	0.84	0.39			24	
SB7	SP361	楕円	(0.93)	0.72	0.24			24	
	SP316	円	0.55	0.44	0.17			25	
	SP317	円	0.51	0.50	0.15			25	
	SP318	円	0.55	0.48	0.11			25	
	SP319	円	0.46	0.41	0.16			25	
	SP320	円	0.52	0.43	0.21			25	
SA1	SP376	楕円	0.71	0.57	0.29			25	
	SP382	圓丸方	0.61	0.60	0.17		SP383を切っている。	25	
	SP397	円	0.52	0.46	0.15			25	
	SP405	圓丸方	0.65	0.57	0.13		SP406を切っている。	25	
	SP408	円	(0.60)	(0.24)	(0.12)		SP407に切られている。	25	
	SP420	圓丸方	0.93	0.73	0.19			25	
() 内は残存長、又は復元数値									

(6) 檻 (SA1・SA2)

SA1 (図 25、表 5)

調査区第1区の西側で検出された掘立柱建物である。軸方向はおよそ N - 27° - W の方位を示す。柱間は約 1.8 ~ 2.0 m を測る。柱穴は、SP316・SP317・SP318・SP319・SP320 で構成され、掘り方の平面形は円形で直径は約 0.41 ~ 0.55 m、深さは約 0.11 ~ 0.21 m を測る。

出土遺物がないため、時期を比定し得ない。また、SB1・SB2・SB3 と主軸方位が異なるため、これら 3 棟の建物と異なる時期の可能性が考えられる。

SA2 (図 25、表 5)

調査区第1区の北西側で検出された掘立柱建物である。軸方向はおよそ N - 31° - W の方位を示し、L 字状に屈曲する。柱間は約 1.40 ~ 2.00 m を測る。柱穴は、SP376・SP382・SP397・SP405・SP408・SP420 で構成され、掘り方の平面形は円形・楕円形・隅丸方形が混在しており、1 辺（直径）は約 0.47 ~ 0.93 m、深さは約 0.13 ~ 0.29 m を測る。

出土遺物がないため、時期を比定し得ないが、SB1・SB2・SB3 と主軸方位が同じため、これら 3 棟の建物と同時期または極めて近い時期と推定される。

(7) 溝 (SD26・SD107・SD198・SD259・SD267・SD546・SD570・SD615)

SD26 (図 26)

調査区第1区の北東側で検出されたU字状に屈曲する溝である。幅約 0.47m、長さ約 3.90 m、深さ約 0.14 m で断面はU字状を呈する。埋土は灰黄褐色土の 1 層である。

遺物は、出土していない。

SD106 (図 16)

調査区第1区の南側で検出された溝である。調査区外に伸びていくため全容は不明であるが、検出部の長さは約 1.83 m、幅は 0.35 m、深さは 0.25 m で断面はU字状を呈する。埋土は黄灰色粘質土の 1 層である。

遺物は、出土していない。

SD198 (図 27)

調査区第1区の南西側で検出された溝である。調査区外に伸びていくため全容は不明であるが、検出部の長さは約 3.18 m、幅は約 1.34 m、深さは約 0.14 m で断面舟底状を呈する。埋土は灰黄褐色粘質土の 1 層である。

遺物は、出土していない。

SD259 (図 27)

調査区第1区の南西側で検出された溝である。長さは約 3.30 m、幅は約 0.62 m、深さは約 0.39 m で断面はU字状を呈する。埋土は灰黄褐色砂礫土の 1 層である。

遺物は、出土していない。

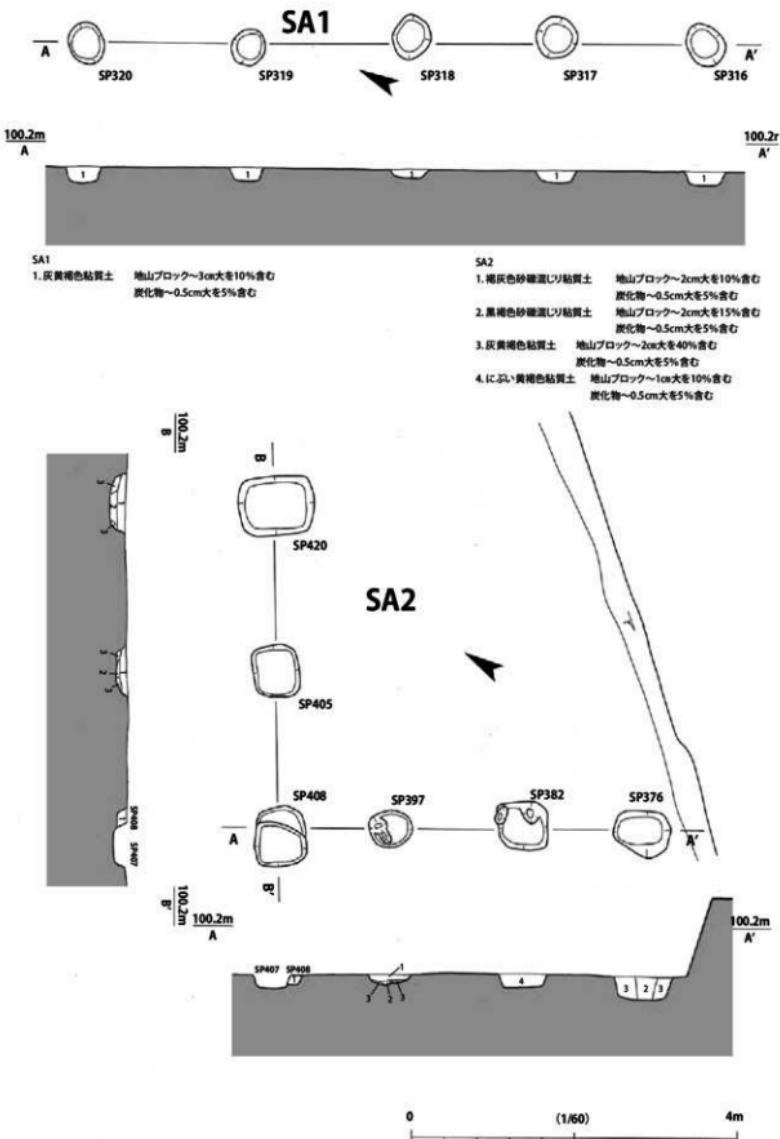


図 25 棚 (SA1・SA2) 平面図・断面図

SD267 (図 28)

調査区第1区の南西側で検出された溝である。長さは約3.70m、幅は約1.10m、深さは約0.38mで断面はV字状を呈する。埋土は灰黄褐色砂礫土の1層である。

遺物は、出土していない。

SD546 (図 31)

調査区第1区の北側で検出された溝である。長さは約3.40m、幅は約0.79m、深さは約0.28mで断面は舟底状を呈する。埋土はにぶい黄褐色粘質土の1層である。

遺物は、出土していない。

SD570 (図 31・34・35)

調査区第2区の北東側で検出されたN-79°-W方向の直線の溝である。調査区外に伸びていくため全容は不明であるが、検出部の長さは約16.48m、幅は1.29m、深さは約0.14mで断面は舟底状を呈する。埋土は褐灰色粘質土の1層である。SD615と一連の溝の可能性がある。

遺物は、土師器(49)と焼成粘土塊(51~53)が出土した。

49は、土師器の高壺である。51は縦4.7cm、横3.7cm、厚さ3.0、52は縦4.3cm、横3.5cm、厚さ1.2cm、53は縦2.6cm、横2.3cm、厚さ1.3cmをそれぞれ測る。いずれも緻密な胎土であるが、52と53には表面に赤黒色の溶着物が付着する。

SD615 (図 32)

調査区第3区の中央付近で検出されたN-76°-W方向の直線の溝である。調査区外に伸びていくため全容は不明であるが、検出部の長さは約7.44m、幅は約1.16m、深さは約0.14mで断面は舟底状を呈する。埋土は灰褐色粘質土の1層である。SD570と一連の溝の可能性がある。

遺物は、小片のため図化していないが土師器が出土した。

- (8) 土坑(SK10・SX35・SX37・SX39・SK49・SK61・SK70・SK158・SK161・SX173・SK174・SK178・SK179・SK221・SX235・SK265・SX293・SK310・SK327・SK332・SK337・SK338・SK339・SX336・SK350・SK380・SK417・SK421・SX422・SK423・SK424・SK431・SK436・SK439・SK460・SX467・SK470・SK494・SK537・SK545・SK584・SK585・SK610・SK611・SK627・SX633・SX635・SK646・SX650)

SK10 (図 26)

調査区第1区の北東側で検出された平面橢円形と思われる土坑である。検出部の最大幅は約0.82m、深さは約0.33mを測る。埋土は黒褐色砂礫混じり粘質土の1層である。

遺物は、出土していない。

SX35 (図 26)

調査区第1区の北東側で検出された平面不定形の土坑である。調査区外に伸びていくた

め全容は不明である。検出部の長辺は約 1.55 m、短辺は約 0.72 m、深さは約 0.38 m を測る。埋土は灰黄褐色粘質土の 1 層である。SX37 を切っている。

遺物は、出土していない。

SX37（図 26）

調査区第 1 区の北東側で検出された平面不定形の土坑である。検出部の長辺は約 3.08 m、短辺は約 0.66 m、深さは約 0.24 m を測る。埋土は褐灰色粘質土の 1 層である。SX35 に切られている。

遺物は、出土していない。

SX39（図 26）

調査区第 1 区の北東側で検出された平面不定形の土坑である。長辺は約 5.20 m、短辺は約 1.20 m、深さは約 0.14 m を測る。埋土は褐灰色粘質土の 1 層である。SX35 に切られている。

遺物は、出土していない。

SK49（図 26）

調査区第 1 区の北東側で検出された土坑で、調査区外に伸びていくため全容は不明である。検出部の最大幅は約 3.60 m、深さは約 0.30 m を測る。埋土は褐灰色粘質土の 1 層である。

遺物は、出土していない。

SK61（図 26）

調査区第 1 区の北東側で検出された平面楕円形の土坑である。長辺は約 1.98 m、短辺は約 0.78 m、深さは約 0.29 m を測る。埋土は 1 層が灰黄褐色粘質土、2 層が褐色粘質土の 2 層である。

遺物は、出土していない。

SK70（図 26）

調査区第 1 区の北東側で検出された平面円形の土坑である。長辺は約 1.95 m、短辺は約 1.42 m、深さは約 0.35 m を測る。埋土は 1 層が灰黄褐色粘質土、2 層が褐色粘質土の 2 層である。

遺物は、出土していない。

SK158（図 26）

調査区第 1 区の南側で検出された平面隅丸方形の土坑である。長辺は約 0.80 m、短辺は約 0.61 m、深さは約 0.38 m を測る。埋土は褐色粘質土の 1 層である。

遺物は、出土していない。

SK161（図 26・34）

調査区第 1 区の南側で検出された平面円形の土坑である。長辺は約 1.21 m、短辺は約 1.10 m、深さは約 0.69 m を測る。袋状に下方が開く断面形を呈しており、埋土は 1 層が灰褐色砂礫混じり粘質土、2 層が灰黄褐色粘質土で地山ブロックが多めに混じる、3 層が灰黄褐色粘質土、4 層が黒褐色砂礫混じり粘質土、5 層が黄灰色粘質土、6 層がにぶい黄褐色粘質土の 6 層である。

遺物は、須恵器の壺蓋（46）が、また小片のため図化していないが土師器が出土した。

SX173（図27）

調査区第1区の南側で検出された不定形土坑で、調査区外に伸びていくため全容は不明である。検出部の最大の長さは約4.06m、幅は約1.49m、深さは約0.26mを測る。埋土は1層は暗褐色粘質土、2層は黒褐色粘質土の2層である。

遺物は、出土していない。

SK174（図27）

調査区第1区の南側で検出された平面隅丸方形の土坑である。SX173に隣接する。長辺は約0.84m、短辺は約0.79m、深さは約0.18mを測る。埋土は黒褐色粘質土の1層である。

遺物は、出土していない。

SK178（図27）

調査区第1区の南側で検出された平面円形の土坑である。長辺は約0.93m、短辺は約0.77m、深さは約0.37mを測る。埋土は1層が黒褐色粘質土、2層がにぶい黄褐色粘質土の2層である。SP177に切られる。

遺物は、土師器の壺（47）が出土した。

SK179（図27）

調査区第1区の南側で検出された平面隅丸方形の土坑である。長辺は約0.54m、短辺は約0.45m、深さは約0.23mを測る。埋土は1層が黒褐色粘質土、2層が灰褐色粘質土の2層である。

遺物は、出土していない。

SK221（図27）

調査区第1区の南西側で検出された平面楕円形の土坑である。長辺は約2.32m、短辺は約0.98m、深さは約0.15mを測る。埋土は灰黄褐色粘質土の1層である。

遺物は、出土していない。

SK265（図28）

調査区第1区の南西側で検出された平面隅丸方形の土坑である。長辺は約1.38m、短辺は約0.92m、深さは約0.23mを測る。埋土は灰黄褐色粘質土の1層である。

遺物は、出土していない。

SK293（図28）

調査区第1区の南西側で検出された平面不定形の土坑である。長辺は約4.05m、短辺は約1.29m、深さは約0.24mを測る。埋土はにぶい黄褐色粘質土の1層である。SP292に切られている。

遺物は、出土していない。

SK310（図28）

調査区第1区の南西側で検出された平面楕円形の土坑である。長辺は約3.05m、短辺は約1.35m、深さは約0.84mを測る。埋土は1層が黒褐色粘質土、2層が褐灰色砂礫混じ

り粘質土、3層が暗褐色粘質土、4層が灰褐色粘質土、5層が褐灰色粘質土、6層が灰黄褐色粘質土、7層がぶい黄褐色粘質土の7層である。SP282を切っている。

遺物は、出土していない。

SK327（図29）

調査区第1区の西側で検出された平面円形の土坑である。長辺は約0.94m、短辺は約0.92m、深さは約0.48mを測る。埋土は褐灰色粘質土の1層である。同規模のSK332・SK337・SK338・SK339と隣接する。

遺物は、出土していない。

SK332（図29）

調査区第1区の西側で検出された平面円形の土坑である。長辺は約1.26m、短辺は約1.05m、深さは約0.44mを測る。埋土は褐灰色粘質土の1層である。同規模のSK327・SK337・SK338・SK339と隣接する。

遺物は、出土していない。

SK337（図29）

調査区第1区の西側で検出された平面円形の土坑である。長辺は約1.26m、短辺は約1.20m、深さは約0.21mを測る。埋土は灰黄褐色粘質土の1層である。同規模のSK327・SK332・SK338・SK339と隣接する。

遺物は、出土していない。

SK338（図29）

調査区第1区の西側で検出された平面円形の土坑である。長辺は約0.95m、短辺は約0.93m、深さは約0.34mを測る。埋土は灰黄褐色粘質土の1層である。同規模のSK327・SK332・SK337・SK339と隣接する。

遺物は、出土していない。

SK339（図29）

調査区第1区の西側で検出された平面円形の土坑である。長辺は約1.37m、短辺は約0.97m、深さは約0.17mを測る。埋土は灰黄褐色粘質土の1層である。同規模のSK327・SK332・SK337・SK338と隣接する。

遺物は、出土していない。

SK350（図28）

調査区第1区の西側で検出された土坑である。長辺は約2.30m、短辺は約0.69m、深さは約0.40mを測る。埋土は灰黄褐色砂礫土の1層である。

遺物は、出土していない。

SK380（図29）

調査区第1区の北西側で検出された土坑である。調査区外に伸びていくため全容は不明である。検出部の最大幅は約2.34m、深さは約0.29mを測る。埋土は灰黄褐色粘質土

の1層である。

遺物は、出土していない。

SK417（図29）

調査区第1区の北西側で検出された土坑である。長辺は約2.48m、短辺は約1.45m、深さは約0.30mを測る。埋土は灰黄褐色粘質土の1層である。SP418を切っている。

遺物は、出土していない。

SK421（図29）

調査区第1区の北西側で検出された平面梢円形の土坑である。長辺は約1.71m、短辺は約0.72m、深さは約0.20mを測る。埋土はにぶい黄褐色粘質土の1層である。

遺物は、出土していない。

SK422（図29）

調査区第1区の北西側で検出された平面不定形の土坑である。長辺は約1.37m、短辺は約0.28m、深さは約0.30mを測る。埋土は褐色砂礫詰り粘質土の1層である。SP423に切られる。

遺物は、出土していない。

SK423（図29）

調査区第1区の北西側で検出された土坑である。長辺は約3.38m、短辺は約1.18m、深さは約0.60mを測る。埋土は1層が褐色砂礫混じり粘質土、2層がにぶい黄褐色粘質土、3層が黒褐色砂礫混じり粘質土、4層が灰黄褐色粘質土の4層である。SK424を切っている。

遺物は、出土していない。

SK424（図29）

調査区第1区の北西側で検出された土坑である。残存部の最大幅は約1.30m、深さは約0.18mを測る。埋土はにぶい黄褐色粘質土の1層である。SK423に切られている。

遺物は、出土していない。

SK431（図30）

調査区第1区の北西側で検出された平面形が隅丸方形の土坑である。長辺は約1.82m、短辺は約1.76m、深さは約0.38mを測る。埋土は1層が褐色粘質土、2層が灰黄褐色粘質土、3層がにぶい黄褐色粘質土、4層が褐色粘質土の4層である。

遺物は、出土していない。

SK436（図30）

調査区第1区の北西側で検出された土坑である。調査区外に伸びていくため全容は不明である。検出部の最大幅は約1.74m、深さは約0.34mを測る。埋土は1層が褐色粘質土、2層が灰黄褐色粘質土の2層である。

遺物は、出土していない。

SK439（図30）

調査区第1区の北側で検出された平面形が梢円形の土坑である。長辺は約2.01m、短辺

は約 1.38 m、深さは約 0.47 m を測る。埋土は 1 層が黒褐色砂礫混じり粘質土、2 層がにぶい黄褐色粘質土、3 層がにぶい黄褐色砂礫混じり粘質土、4 層が黒褐色砂礫混じり粘質土、5 層が褐色粘質土、6 層が灰褐色粘質土、7 層が暗褐色粘質土の 7 層である。

遺物は、出土していない。

SK460 (図 30)

調査区第 1 区の北西側で検出された土坑である。長辺は約 2.55 m、短辺は約 0.79 m、深さは約 0.24 m を測る。埋土は 1 層が灰黄褐色粘質土、2 層が褐色粘質土の 2 層である。

遺物は、出土していない。

SK467 (図 30)

調査区第 1 区の北西側で検出された平面不定形の土坑である。長辺は約 3.55 m、短辺は約 0.37 m、深さは約 0.52 m を測る。埋土は 1 層が褐灰色粘質土、2 層がにぶい黄褐色粘質土、3 層が灰黄褐色粘質土、4 層がにぶい褐色粘質土の 4 层である。

遺物は、出土していない。

SK470 (図 30)

調査区第 1 区の北西側で検出された平面形が隅丸方形の土坑である。長辺は約 0.78 m、短辺は約 0.62 m、深さは約 0.26 m を測る。埋土は 1 層が褐灰色粘質土、2 層が灰黄褐色粘質土の 2 層である。

遺物は、出土していない。

SK494 (図 30)

調査区第 1 区の北西で検出された平面形が隅丸方形の土坑である。長辺は約 1.06 m、短辺は約 0.85 m、深さは約 0.17 m を測る。埋土は 1 層が褐灰色粘質土、2 層が灰黄褐色粘質土の 2 層である。

遺物は、出土していない。

SK537 (図 30)

調査区第 1 区の北側で検出された平面形が円形の土坑である。長辺は約 0.86 m、短辺は約 0.70 m、深さは約 0.42 m を測る。埋土は 1 層が灰黄褐色粘質土、2 層がにぶい黄褐色粘質土、3 層が褐色粘質土の 3 層である。

遺物は、出土していない。

SK545 (図 31)

調査区第 1 区の北側で検出された土坑である。長辺は約 1.28 m、短辺は約 0.96 m、深さは約 0.29 m を測る。埋土は 1 層が灰黄褐色粘質土、2 層が褐色粘質土の 2 層である。

遺物は、出土していない。

SK584 (図 31)

調査区第 2 区の北東側で検出された土坑である。調査区外に伸びていくため全容は不明である。検出部の最大幅は約 1.76 m、深さは約 0.21 m を測る。埋土は 1 層が褐灰色粘質土、

2層が灰黄褐色粘質土の2層である。SK585に隣接する。

遺物は、出土していない。

SK585（図31）

調査区第2区の北東側で検出された土坑である。調査区外に伸びていくため全容は不明である。検出部の最大幅は約1.17m、深さは約0.35mを測る。埋土は1層が褐灰色粘質土、2層が灰黄褐色粘質土の2層である。SK584に隣接する。

遺物は、出土していない。

SK610（図31）

調査区第3区の西側で検出された平面形が円形の土坑である。SK611に切られている。残存部の長辺は約1.10m、短辺は約0.85m、深さは約0.11mを測る。埋土は灰褐色粘質土の1層である。

遺物は、出土していない。

SK611（図31）

調査区第3区の西側で検出された平面形が円形の土坑である。長辺は約0.96m、短辺は約0.92m、深さは約0.74mを測る。埋土は灰黄褐色粘質土の1層である。SK610を切っている。

遺物は、小片のため図化していないが、須恵器が出土した。

SK612（図34）

調査区第3区の西側で検出された平面形が円形の土坑である。調査区外に伸びていくため全容は不明である。検出部の最大幅は約1.94m、深さは約0.52mを測る。埋土は灰黄褐色粘質土の1層である。

遺物は、石器（50）が出土した。

50は砥石である。長さ11.5cm、幅6.7cm、厚さ3.8cmを測る。石材は砂岩である。

SK627（図32）

調査区第3区の中央付近で検出された平面形が隅丸方形の土坑である。長辺は約1.08m、短辺は約0.70m、深さは約0.15mを測る。埋土は灰黄褐色粘質土の1層である。

遺物は、出土していない。

SX633（図32）

調査区第3区の北側で検出された平面不定形の土坑である。長辺は約3.05m、短辺は約1.84m、深さは約0.22mを測る。埋土は黒褐色砂礫混じり粘質土の1層である。

遺物は、出土していない。

SX635（図32）

調査区第3区の北側で検出された平面不定形の土坑である。長辺は約2.58m、短辺は約1.93m、深さは約0.21mを測る。埋土は灰黄褐色粘質土の1層である。

遺物は、出土していない。

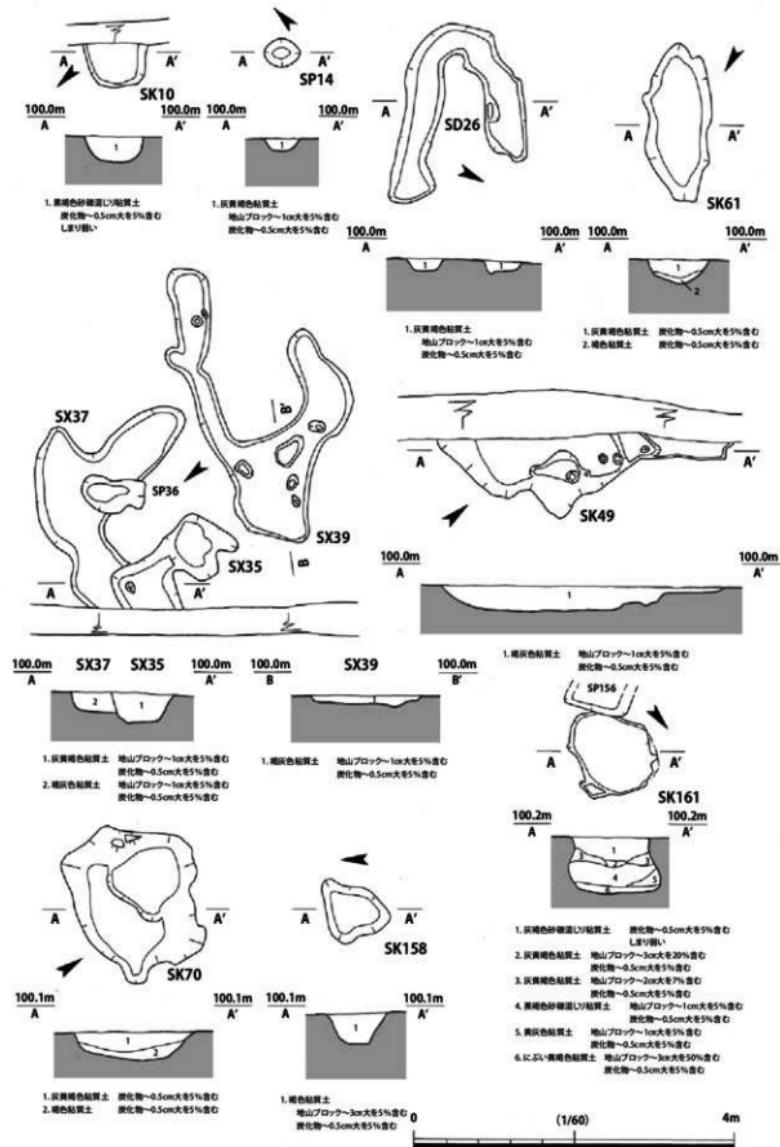


図 26 各造構 平面図・断面図 (1)

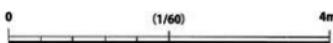
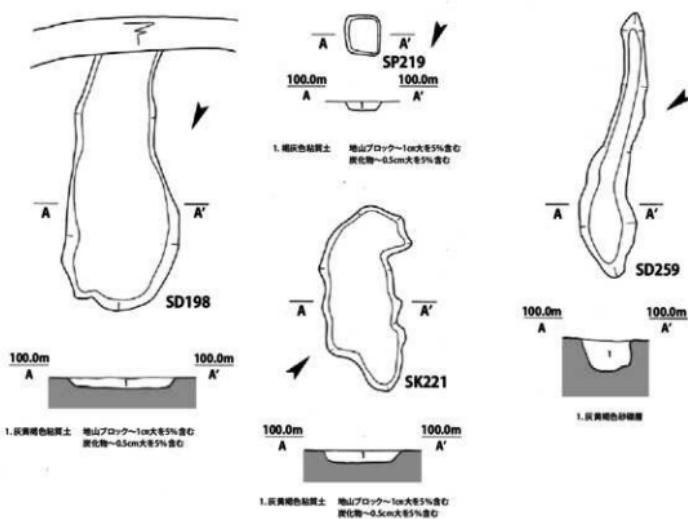
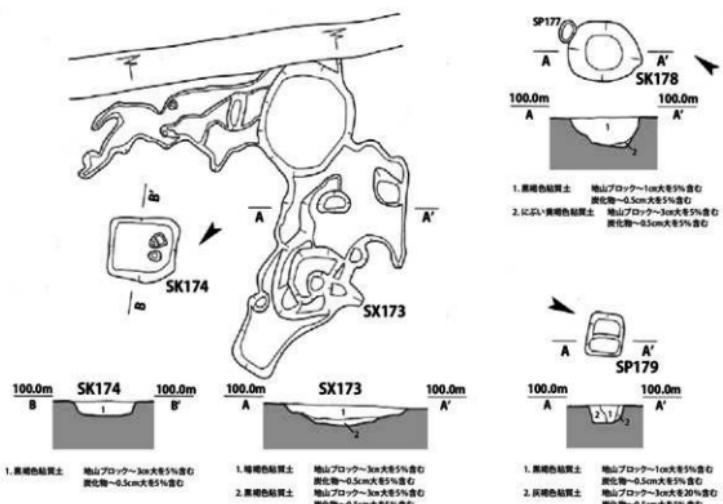


図27 各遺構 平面図・断面図(2)

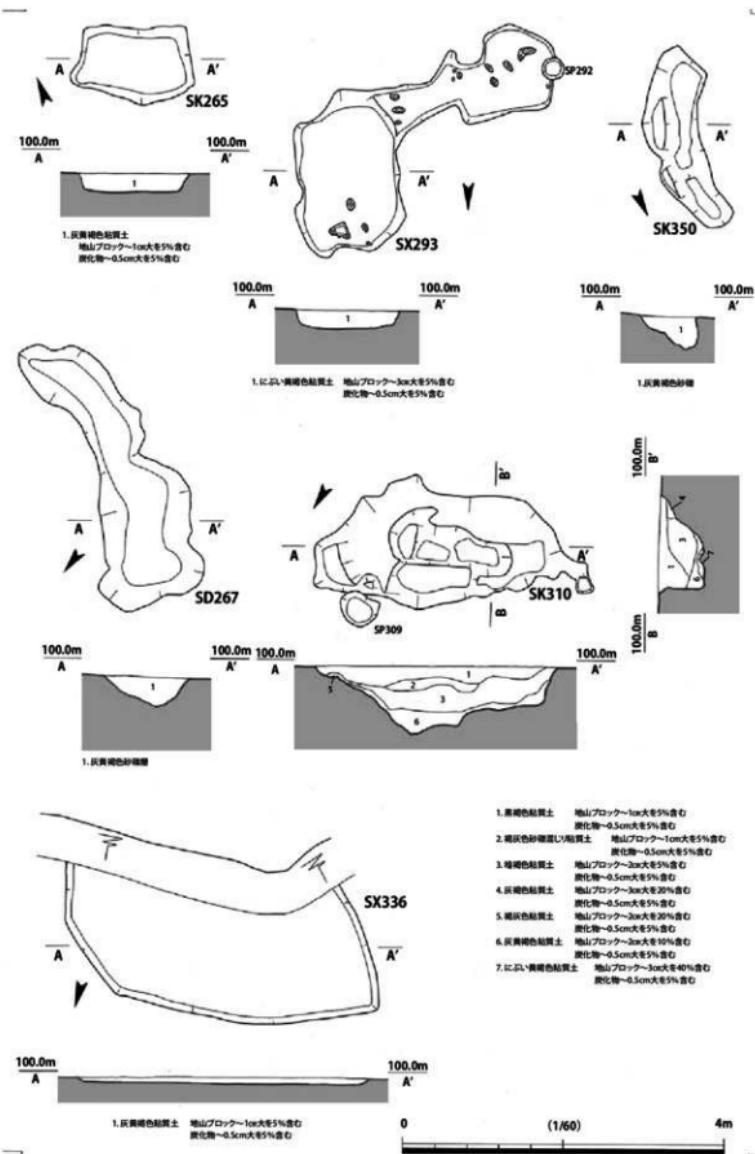


図28 各遺構 平面図・断面図(3)

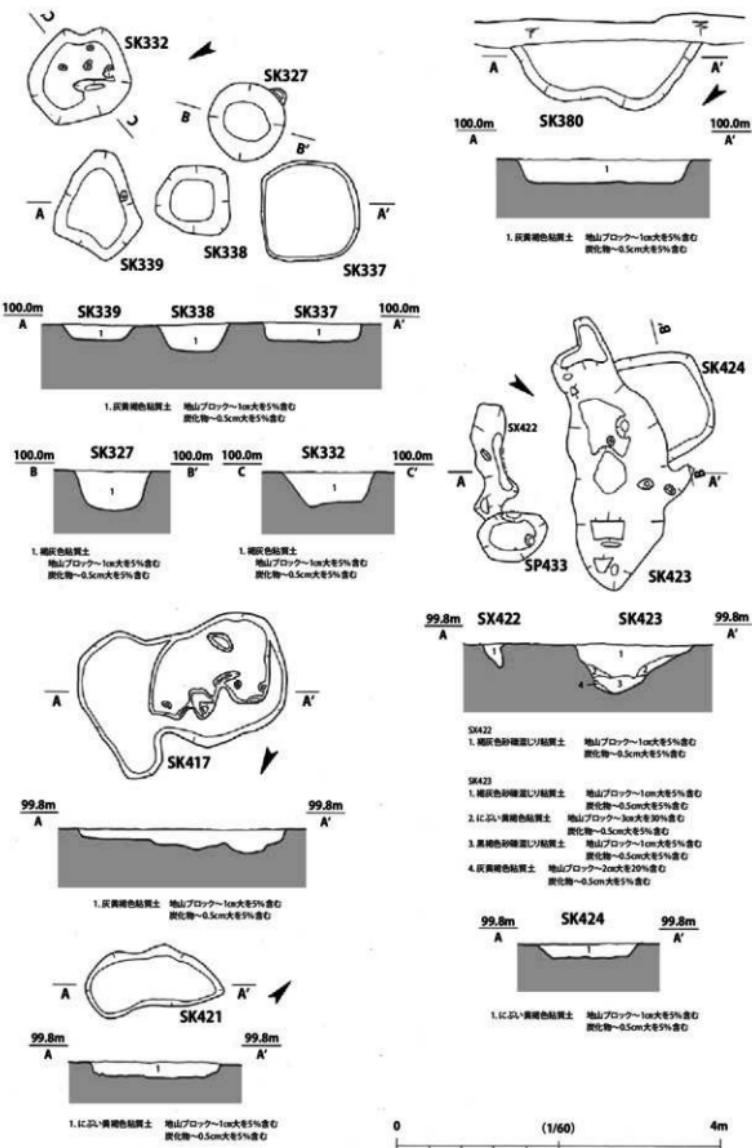


図 29 各遺構 平面図・断面図 (4)

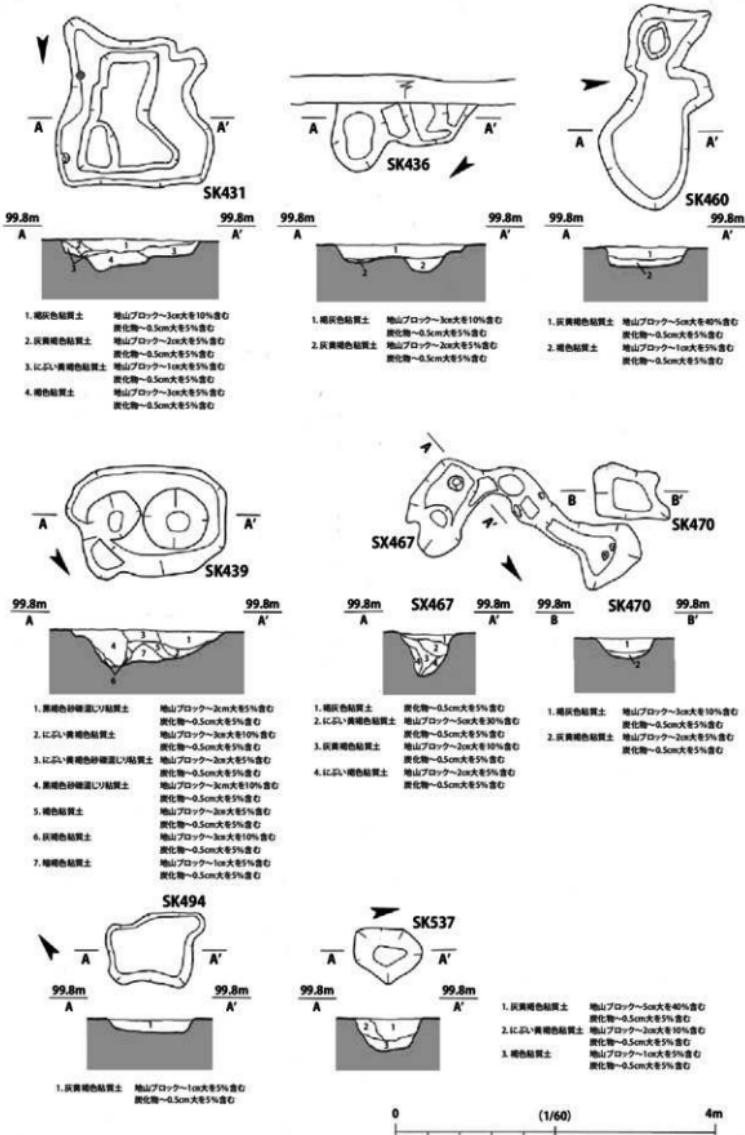


図 30 各遺構 平面図・断面図 (5)

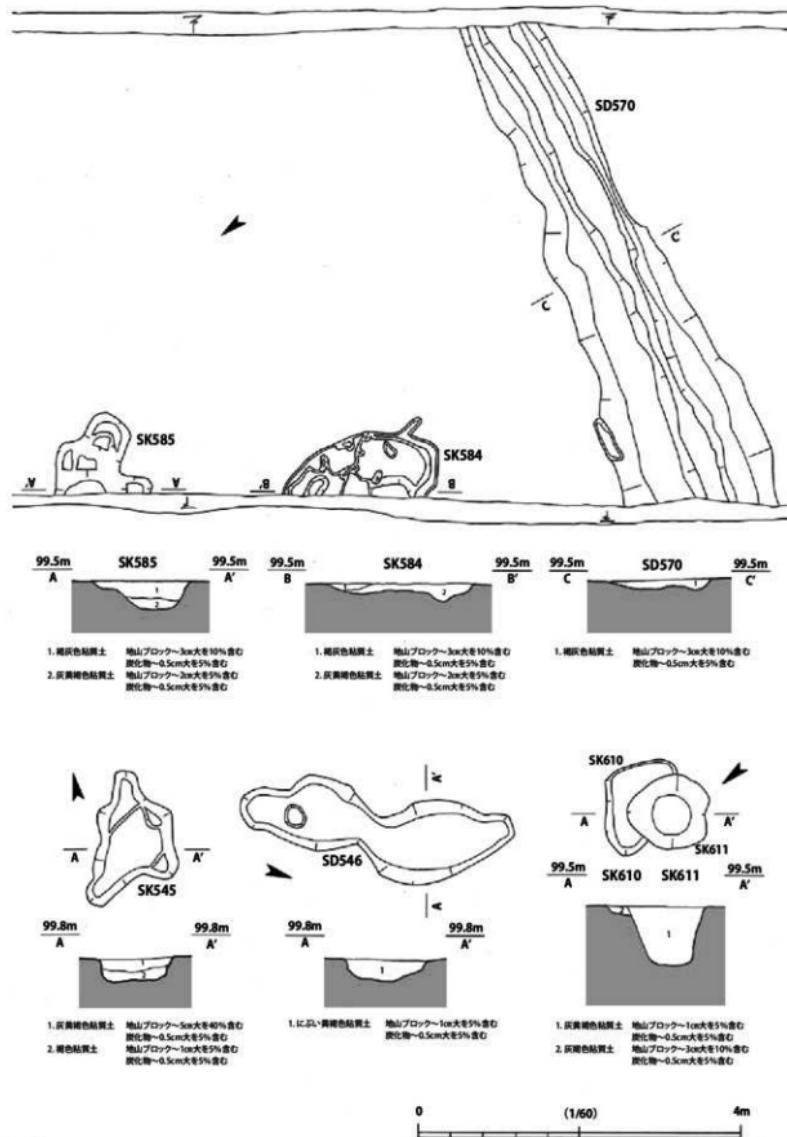


図31 各遺構 平面図・断面図(6)

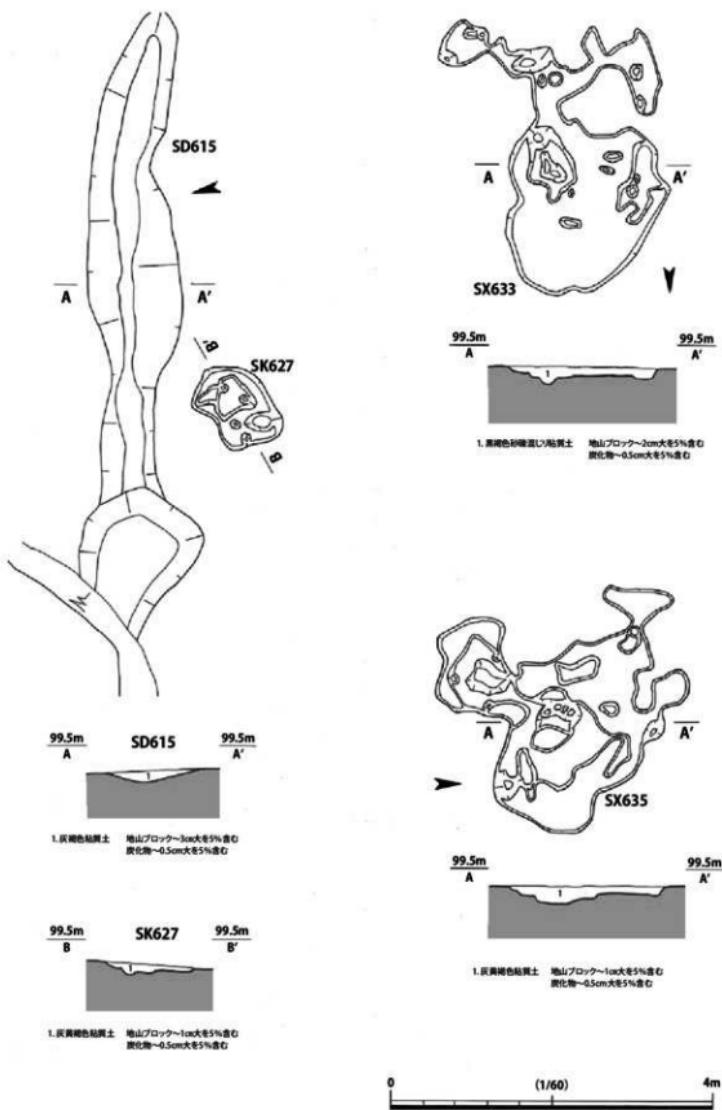


図 32 各遺構 平面図・断面図 (7)

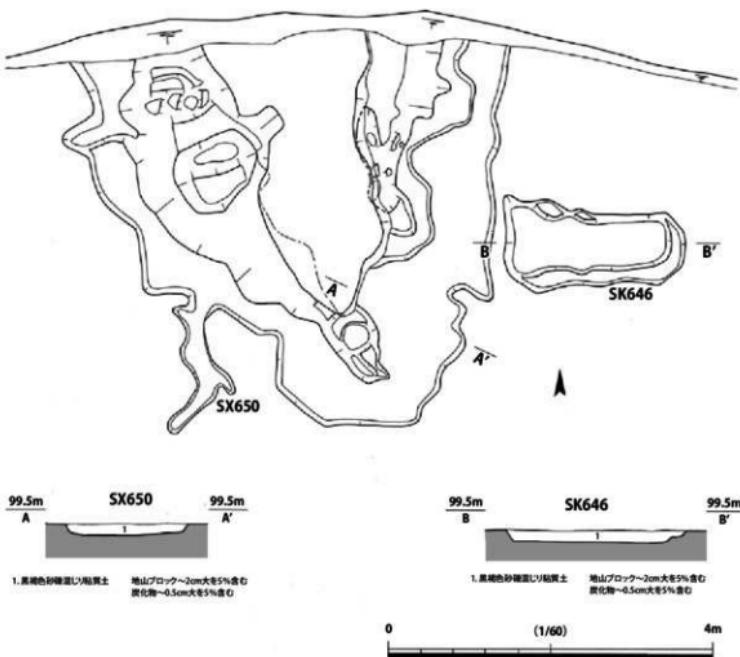


図33 各遺構 平面図・断面図

SK646 (図33)

調査区第3区の北東側で検出された平面形が隅丸方形の土坑である。長辺は約2.22m、短辺は約0.88m、深さは約0.14mを測る。埋土は黒褐色砂礫混じり粘質土の1層である。

遺物は、出土していない。

SX650 (図33)

調査区第3区の北東側で検出された平面不定形の土坑である。長辺は約9.26m、短辺は約1.48m、深さは約0.13mを測る。埋土は灰黄褐色粘質土の1層である。

遺物は、出土していない。

(9) 小穴 (SP111・SP219)

SP111 (図26・34)

調査区第1区の南西側で検出された平面形が円形の小穴である。長辺約0.40m、短辺約0.37m、深さ0.40mを測る。埋土は褐灰色粘質土を呈する。

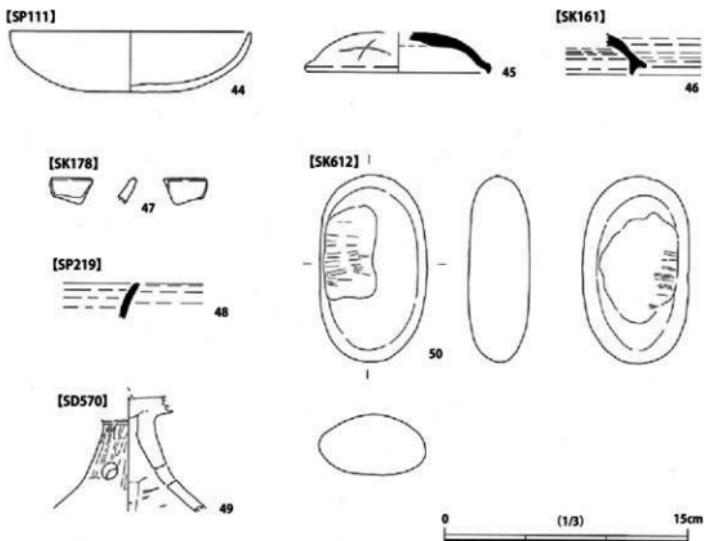


図34 各遺構 (SP111・SK161・SK178・SP219・SD570・SK612) 出土遺物実測図

遺物は、土師器（44）と須恵器（45）が出土した。

44は土師器の壺で、口径15.0cm、器高3.7cmを測る。口縁部は内湾する。45は須恵器の壺蓋で、口径11.4cm、残存器高2.5cmを測る。山形の天井部で端部は短く屈曲する。

これらの遺物の年代観から、小穴SP111の時期は8世紀後半と考えられる。

SP219（図27・34）

調査区南西端で検出された平面形か隅丸方形の小穴である。長辺約0.50m、短辺約0.44m、深さ0.12mを測る。埋土は褐灰色粘質土を呈する。

遺物は、須恵器の壺身（48）が出土した。

(10) その他 (SX336)

SX336（図28）

調査区第1区の西側で検出された平面隅丸方形の遺構である。自然流路NR362上面で検出した。調査区端にかかっているため、概ね平面プラン半分ほどの検出となつたが検出部の最大幅は約3.60mを測る。深さは約0.09mを測り非常に浅い。平面プランの主軸はおよそN-17°-Wの方位をとる。埋土は灰黄褐色粘質土の1層である。

遺物は、小片のため図化していないが、土師器が出土した。

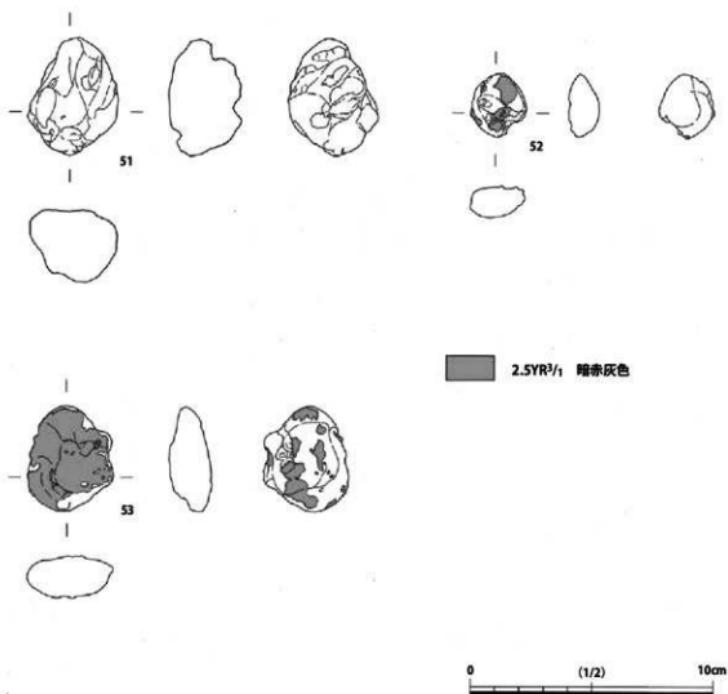


図35 溝（SD570）出土遺物実測図

(11) 小結

今回の調査では、7世紀後半～8世紀と推定される集落関連遺構を確認した。当該期の遺構は竪穴建物2軒(SH100・SH235)と掘立柱建物5棟(SB1・SB2・SB3・SB6・SB7)、柵1条(SA2)と複数の土坑や小穴であった。建物の主軸はN-30°～34°-Wの方位をとる。掘立柱建物は全て調査区端にかかっているため、建物プランや規模の全容がわかるものがないが、SB1・SB2・SB3は柱穴が方形で直径0.8m前後を測り、比較的大型の建物が想定される。また、これら3棟は柱穴の切り合い関係よりSB1→SB2→SB3の順番に建て替えが行われている。これらと主軸と同じくする竪穴建物SH235、掘立柱建物SB6とSB7、柵

SA2に関してはほぼ同時期の遺構と推定される。

竪穴建物と掘立柱建物の前後関係についてだが、竪穴建物 SH100 と掘立柱建物 SB1・SB2 の出土遺物に大きな時期差が認められない点と、お互いの主軸が同一である点より、現段階では同時期、すなわち竪穴建物と掘立柱建物で構成される集落と評価しておきたい。ただ、この点に関しては、検討対象の検出遺構・出土遺物ともにまだ極めて限られているため、今後の調査の進展・蓄積を待って、改めて検討を行う必要がある。

出土遺物がなく、上記の建物群とは主軸が異なる掘立柱建物 2 棟(SB4・SB5)、柵 1 条(SA1)については時期は不明と言わざるを得ない。しかし、包含層を含め、今回の調査区での出土遺物が、ほとんどが 7 世紀～8 世紀に限られていることを勘案すると、その範囲の中で納まる可能性が高いと推察される。

参考文献

- 大崎哲人 1993「土師器壺の変遷とその背景 —近江型土師器成立への諸段階—」『紀要』第 6 号
財団法人滋賀県文化財保護協会
- 葛野泰樹・吉田秀則 1993「松原内湖遺跡出土の古墳時代後期以降の須恵器と土師器」『松原内湖
遺跡発掘調査報告書 I』滋賀県教育委員会・(財) 滋賀県文化財保護協会
- 田辺昭三 1981『須恵器大成』角川書店

第3章 総 括

第1節 調査の成果と課題について

今回の調査は道ノ下遺跡における第2次調査であった。第1次調査は個人住宅建設に伴うものであり、非常に限られた面積での調査であったことを勘案すると、今回の調査は当該遺跡ならびに芹川流域の古代史を解明する上で貴重な調査成果を得ることができたと言える。ここでは、改めて今回の調査成果を振り返りつつ、若干の検討を加え、まとめとしたい。

(1) 道ノ下遺跡と芹川の関わり (図 36)

まず、今回の調査で、道ノ下遺跡周辺の自然環境を形成してきた要因について、考古学的な知見を得ることができた。調査前の知見として、「地理的環境」の項でも触れたが、道ノ下遺跡は芹川の左岸に位置し、芹川が形成する扇状地の扇端部となる標高約100mの湧水帯に位置する。湧水帯ということもあり、周辺には東沼波井などの複数の用水路が走っているが、これは東部で接する大堀で芹川から取水されたものであり、東沼波の東端付近に入ったところで放射状に分岐している。この分岐部分一帯は畑が多いことを考え合わせると、この用水路沿い

一帯に、かつて芹川の洪水が押し寄せたことがあったと推定された。その推定を裏付けるように、調査地一帯の地割は、東に $31^{\circ} \sim 34^{\circ}$ 程度振る大上郡条里的地割ではなく、様々な方向を向いたものであり、かなり不規則な形状となっている。このように、遺跡の立地と周辺に網状に広がる用水路、不規則な地割の状況などを勘案すると、道ノ下遺跡周辺の自然環境を形成してきた要因として、芹川の洪水との関わりが予測される状況であった。調査の結果、それらの予測を裏付けるように、東西方向の自然流路が複数確認された。自然流路は遺構面である基盤層で確認されるものもあれば、上層の包含層においても確認されるものもあり、当該地が断続的に芹川の影響を受けている状況が明らかにされた。このような、自然環境を背景に、道ノ下遺跡の古代集落は発展したのである。

(2) 道ノ下遺跡の古代集落の様相と今後の課題



図36 東沼波井の水掛け(『新修彦根市史』第10巻景観編より)

今回の発掘調査では、調査区全域で複数の竪穴建物と掘立柱建物、土坑や小穴などが確認された。その中で主体となるのは、7世紀後半から8世紀にかけての集落跡である。竪穴建物2軒(SH100・SH235)と掘立柱建物5棟(SB1・SB2・SB3・SB6・SB7)、柵1条(SA2)と複数の土坑や小穴などで構成されており、竪穴建物と掘立柱建物が併存する集落である。建物・柵の主軸は犬上郡の統一条里と異方向のN-30°~34°-Wを主体としており、この方位は、現地に残る地割の方位とも異なる。今回検出された竪穴建物・掘立柱建物は全て調査区端にかかっているため、建物プランや規模の全容がわかるものがないが、SB1・SB2・SB3は柱穴が方形で直径0.8m前後と比較的大きく、柱間がほぼ規則的で、柱通りも良好な規格制をもった大型建物ということができる。また、建物の隅が検出されているSB2とSB3の隅柱は柱穴が深く、底部にわずかながら小礫が確認されており、何らかの基礎固めが行われていた可能性も想定される。これら3棟の掘立柱建物は柱穴の切り合い関係よりSB1→SB2→SB3の順番に建て替えが行われており、集落の存続期間が一定期間あったことを想起させる。集落の範囲だが、SB6とSB7、SA1より北西側には、建物遺構が広がっていないため、これらの建物・柵のラインが集落の北西側縁辺部と考えられる。これより南東側とSB1・SB2・SB3・SH100の建物群より北西側の範囲に当該集落の関連遺構が広がっていると推測される。この範囲は、今回の宅地造成工事の宅地部分にあたり、今後調査の機会があれば更なる集落の様相を掴むことができるであろう。

最後に、ここまで整理してきた道ノ下遺跡の古代集落について、周辺の遺跡の状況を加味して若干の検討を加えたい。道ノ下遺跡の東方約500mには、古代幹線道路である東山道と烏籠駅推定地の大堀山が位置する。この東山道に沿うように周辺には犬上郡における重要遺跡が數多く存在している。まず、東山道の西方に目を向けると、犬上郡における中心的な白鳳寺院である竹ヶ鼻磨寺(竹ヶ鼻磨寺遺跡)と高宮磨寺(遊行塚遺跡)の推定地が位置し、その間に挟まれるように、在地の有力氏族の居宅とも評価される丁田遺跡が位置している。竹ヶ鼻磨寺は湖東三郡でも最古クラスの瓦が出土し、創建瓦に採用された山田寺式の瓦は郡内や湖東周辺の寺々に波及した。また、竹ヶ鼻磨寺遺跡では、3次調査で大規模な掘立柱建物群が見つかっており、犬上郡の都衙推定地となっている。高宮磨寺では藤原宮式の瓦が採用されており、藤原宮の造営に関わった有力氏族との関連が推測される。次に、東山道の東方に目を向けると八反切遺跡や藤丸遺跡が位置する。八反切遺跡では、8世紀後半~9世紀前半の掘立柱建物による集落が確認されている。藤丸遺跡では、7世紀後半から8世紀前半の竪穴建物と掘立柱建物が併存する集落が確認されており、犬上郡の十一郷の一つである高宮郷に関わる集落と推定されている。今回の道ノ下遺跡の調査では、7世紀後半から8世紀にかけての集落跡を確認したが、集落の範囲も建物の規模・配置などもまだまだ不明な点が多い。また、墨書き器などの特殊な遺物も出土していないため、現段階では、より具体的な集落像が言及できない。しかし、今後の検討の方向性も含めて、あえて言及するならば、竪穴建物と掘立柱建物が併存する集落という点、集落を構成する建物の一部が規格制の高い大

型掘立柱建物で構成されるという点より、藤丸遺跡の様相に近いと言うことができよう。藤丸遺跡は高宮郷に関わる推定地と前述したが、犬上郡の郷については『和名類聚抄』に十一郷が記されており、その中に、道ノ下遺跡が位置する沼波の地名も記されている。沼波に位置する遺跡は、下沢遺跡・東沼波遺跡・沼波館跡、そして今回の道ノ下遺跡の4遺跡であるが、当該期の古代集落が確認されたのは今回の調査地が初めてである。そういった意味では、今回の調査地周辺が、沼波郷に関わる遺跡の候補地の一つであることは間違いないであろう。ただ、今回の調査成果は極めて断片的であることも事実である。集落の規模や存続期間、堅穴建物と掘立柱建物の併存の有無、建物の内容・規模・配置など、今後更なる慎重な検討を要する課題が多いことも確かである。

参考文献

- 大崎哲人 1989「滋賀県下における掘立柱建物集落の成立契機について」『紀要』第2号 財団法人滋賀県文化財保護協会
- 滋賀県立安土城考古博物館 2006『扇状地の考古学』
- 高橋美久二 2007「律令国家と近江」『新修彦根市史 第1巻通史編古代・中世』彦根市
- 田中勝弘 2012「古代集落と地域開発（3）一犬上川流域とその周辺の開発経緯の諸相一」『淡海文化財論叢 第4輯』淡海文化財論叢刊行会
- 彦根市教育委員会 1985『竹ヶ鼻庵寺・品井戸遺跡（第4次）』彦根市埋蔵文化財調査報告書第8集
- 彦根市教育委員会 1987『福満遺跡』彦根市埋蔵文化財調査報告書第13集
- 彦根市教育委員会 1993『竹ヶ鼻庵寺発掘調査報告書』彦根市埋蔵文化財調査報告書第21集
- 彦根市教育委員会 2005『藤丸遺跡II』彦根市埋蔵文化財調査報告書第37集
- 彦根市教育委員会 2006『八反切遺跡』彦根市埋像文化財調査報告書第38集
- 彦根市教育委員会 2009a『八反切遺跡II』彦根市埋像文化財調査報告書第42集
- 彦根市教育委員会 2009b『丁田遺跡I』彦根市埋像文化財調査報告書第43集
- 彦根市教育委員会 2010a『竹ヶ鼻庵寺遺跡第4次発掘調査報告書』彦根市埋蔵文化財調査報告書第45集
- 彦根市教育委員会 2010b『竹ヶ鼻庵寺遺跡第5次・第6次発掘調査報告書』彦根市埋蔵文化財調査報告書第46集
- 彦根市教育委員会 2011『丁田遺跡II』彦根市埋像文化財調査報告書第48集
- 彦根市教育委員会 2013『丁田遺跡III』彦根市埋像文化財調査報告書第53集
- 彦根市教育委員会 2013『藤丸遺跡III』彦根市埋蔵文化財調査報告書第53集
- 彦根市教育委員会 2014『藤丸遺跡IV』彦根市埋蔵文化財調査報告書第55集
- 彦根市教育委員会 2014『平成24年度 彦根市内遺跡発掘調査報告書』彦根市埋蔵文化財調査報告書第58集
- 彦根市教育委員会 2018『藤丸遺跡第5・6・7次発掘調査報告書』彦根市埋蔵文化財調査報告書第78集
- 広瀬和雄 1989「畿内の古代集落」『国立歴史民俗博物館研究報告』第22集

表6 出土遺物一覧

登記番号	出土地点	種類	形態	部位	残存率	法量 (cm)	出土 位置 (層付)	地質 (層付)	構成	色調		備考		
										外觀				
										内面	内面			
1	包合層	土鉢群	坪	口縁部～底部	3/10	13.0	10.9	3.0	赤	赤	7.5R	7.6R	7.5R	7.6R
2	包合層	土鉢群	坪	口縁部	1/12	—	—	—	密	赤	2.5Y	5/6暗赤色	7.5R	6/6暗
3	包合層	土鉢群	鍋	口縁部	1/12	24.0	—	(3.6)	密	黄	10YR	8/4浅黃褐色	7.5R	7/6暗
4	包合層	土鉢群	壺	口縁部～全体	1/12	15.6	—	(7.5)	密	黄	10YR	6/3に5/1黃褐色	10R	7/4に5/1黃褐色
5	包合層	土鉢群	鍋	口縁部	1/12	42.0	—	(3.9)	密	赤	7.5R	8/4浅黃褐色	7.5R	8/4浅黃褐色
6	包合層	須恵器	坪蓋	口縁部～天井部	7/10	12.1	—	3.7	密	良好	5Y	7/1灰白	N	7/6灰白
7	包合層	須恵器	坪蓋	口縁部～天井部	3/10	17.4	—	3.0	密	良好	2.5Y	6/4深灰黑	N	7/6灰白
8	包合層	須恵器	坪蓋	口縁部～天井部	1/5	12.0	—	1.0	密	良好	5Y	7/1灰白	5Y	7/1灰白
9	包合層	須恵器	坪身	口縁部～全体	7/10	12.2	7.0	3.7	密	不良	5Y	8/1灰白	5Y	8/1灰白
10	包合層	須恵器	坪身	底部～全体	1/10	—	8.2	(5.0)	密	良好	N	6/5灰白	N	8/5灰白
11	包合層	須恵器	坪身	底部～全体	1/10	—	6.8	(3.7)	密	良好	5N	6/1灰	N	6/1灰
12	包合層	須恵器	坪身	口縁部～底部	3/5	13.8	9.4	4.5	密	やや不良	2.5Y	8/1灰白	5Y	8/1灰白
13	包合層	須恵器	坪身	完全	4/9/50	14.7	9.4	4.4	密	良好	2.5Y	6/1深灰	2.5Y	8/1灰白
14	包合層	須恵器	鉢身	口縁部	—	—	—	—	密	良好	7.5Y	7/1灰白	2.5Y	6/2深灰
15	包合層	須恵器	鉢身	底部～側部	—	—	11.0	(9.4)	密	良好	5Y	6/1灰	5Y	6/2灰オーリーブ
16	包合層	瓦	平瓦	—	—	10.6	7.1	2.1	やや重	やや不良	2.5Y	8/2灰白	2.5Y	8/2灰白
17	包合層	瓦	平瓦	—	—	8.0	8.0	1.8	密	良	5Y	7/1灰白	5Y	7/1灰白
18	渡横田陣古跡	土器群	底	口縁部～底部	1/12	24.0	—	(2.9)	密	赤	7.5R	7/6暗褐色	7.5R	7/6暗褐色
19	渡横田陣古跡	土器群	底	口縁部～底部	1/12	24.1	—	(6.5)	密	赤	10YR	7/6明褐色	7.5R	7/6暗褐色
20	渡横田陣古跡	土器群	底	口縁部	—	—	—	—	密	赤	10YR	7/4に5/1黃褐色	7.5R	7/6暗褐色
21	渡横田陣古跡	須恵器	坪身	口縁部	—	—	—	12.8	密	良	N	6/5灰白	N	8/5灰白
22	渡横田陣古跡	須恵器	坪身	口縁部	—	—	3.0	6.2	2.2	赤	10YR	8/4浅黃褐色	10R	8/4灰白
23	SH100 1層	土器群	底	口縁部	—	—	—	(2.3)	密	良	10YR	8/4浅黃褐色	10R	8/4灰白
24	SH100 1層	須恵器	底	周部	—	—	—	(2.6)	細密	良好	N	7/6灰白	N	7/6灰白
25	SH100 1層	須恵器	底蓋	底部	—	—	—	(1.9)	密	良好	2.5Y	7/2灰白	5Y	7/1灰白
26	SH100 1層	須恵器	底身	口縁部～側部	1/10	8.2	—	(3.0)	密	良好	N	7/6灰白	N	7/6灰白
27	SH100 2層	土器群	坪	口縁部～側部	1/10	12.0	—	(2.5)	細密	良	5YR	6/6暗	5YR	6/6暗
28	SH100 2層	土器群	底	口縁部	—	—	—	(1.8)	密	赤	7.5R	5/4に5/1褐色	5YR	6/6暗
29	SH100 2層	土器群	底	口縁部	—	—	—	(1.7)	密	赤	10YR	5/3に5/1黃褐色	10R	5/3に5/1黃褐色
30	SH100 2層	土器群	底	口縁部	—	—	—	(2.7)	密	赤	10YR	7/6明褐色	10YR	8/6暗褐色
31	SH100 2層	土器群	底	口縁部	—	—	—	(3.5)	密	やや不良	10YR	8/2灰白	10YR	8/2灰白
32	SH100 2層	土器群	底	口縁部	—	—	—	(3.0)	密	赤	10YR	7/3に5/1黃褐色	2.5Y	4/1灰
33	SH100 2層	土器群	底	口縁部～側部	1/12	11.8	—	(8.6)	密	赤	10YR	8/4浅黃褐色	10YR	8/4灰白
34	SH100 2層	土器群	底	口縁部～側部	1/10	12.8	—	(7.2)	密	赤	10YR	4/2灰黃褐色	10R	5/2灰黃褐色
35	SH100 2層	金屬製品	—	—	—	6.0	7.8	0.4	—	—	5Y	4/6赤褐色	7.5R	4/6暗
36	SP154 1層	土器群	坪身	口縁部～底部	1/10	15.6	8.4	3.6	密	赤	2.5Y	6/2灰白	2.5Y	7/1灰白
37	SP154 1層	土器群	坪身	口縁部	—	—	—	(1.7)	細密	良	5Y	7/6暗	(陶土)10R	8/2灰白
38	SP150 1層	土器群	坪身	口縁部～底部	9/20	15.0	6.4	3.7	細密	赤	7.5R	5/6暗褐色	(陶土)10YR	7/2に5/1黃褐色
39	SP150 1層	須恵器	底	口縁部	—	—	—	(1.1)	密	不良	10YR	8/4浅黃褐色	2.5Y	8/3灰
40	SP151 1層	須恵器	底身	口縁部	—	—	—	(1.1)	密	良	N	7/6灰白	2.5Y	5/1灰
41	SP147 2層	須恵器	底	口縁部	1/12	20.8	16.6	1.8	密	赤	N	7/6灰白	2.5Y	5/1灰
42	SP170 1層	土器群	底	口縁部	—	—	—	(5.2)	密	赤	10YR	8/4浅黃褐色	10YR	7/6明褐色
43	SP143 1層	瓦	丸瓦	—	—	7.3	6.3	1.6	密	不良	2.5Y	8/1灰白	2.5Y	8/1灰白
44	SP111 1層	土器群	坪	口縁部～底部	3/10	15.0	5.0	3.7	細密	良	7.5R	7/6暗褐色	7.5R	7/6暗褐色
45	SP111 1層	須恵器	坪蓋	口縁部～天井部	2/5	11.4	—	(2.5)	密	やや不良	N	7/6灰白	2.5Y	8/1灰白
46	SK161 1層	須恵器	坪蓋	口縁部	—	—	—	(2.5)	密	良	N	6/6	N	6/6
47	SK178 1層	土器群	底	口縁部	—	—	—	(1.6)	密	赤	7.5R	8/3浅黃褐色	7.5R	8/3浅黃褐色
48	SP219 1層	須恵器	坪身	口縁部	—	—	—	(2.2)	密	良好	7.5R	5/1灰	N	7/6灰白
49	SD570 1層	土器群	高杯	縁部	—	—	—	(7.0)	密	赤	5YR	7/6暗	5YR	7/6暗
50	SK612 1層	石器	砾石	—	—	11.5	6.7	3.8	—	—	7.5R	6/1灰	7.5R	6/1灰 (重緑4430kg), 砂岩
51	SD570 1層	土器群	焼成粘土塊	—	—	—	—	—	密	—	7.5R	6/6暗	7.5R	6/6暗 (粘土塊に5mm程の粒子を含む)
52	SD570 1層	土製品	焼成粘土塊	—	—	4.3	3.5	1.2	密	—	2.5R	3/1焼青沢	5YR	5/4焼青沢
53	SD570 1層	土製品	焼成粘土塊	—	—	2.6	2.3	1.3	密	—	2.5R	3/1焼青沢	5YR	5/4焼青沢

※(数値)は推定値



調査前風景（南東より）



調査区第1区全景（垂直写真）

図版一



調査区全景（南より）

図版二



自然流路（NR74・
NR79・NR80）
(北東より)

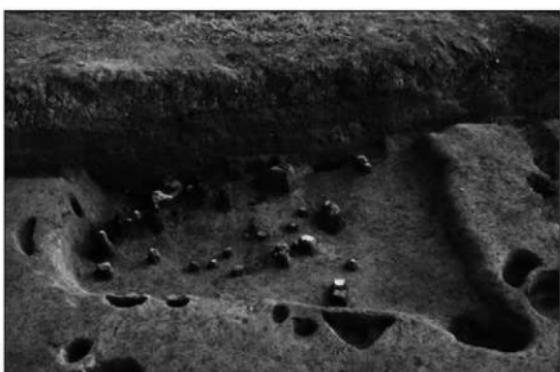


建物群（SH100・
SB1・SB2・SB3）
(南西より)





竪穴建物（SH100）
土層断面（北西より）



竪穴建物（SH100）
遺物出土状況（北西より）



竪穴建物（SH100）
金属製品（35）
出土状況（北西より）

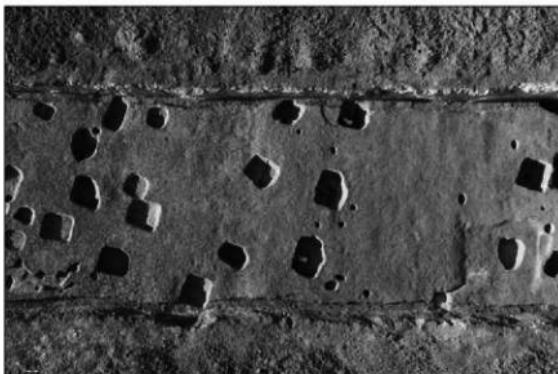
図版五



竪穴建物 (SH100)
全景 (北西より)



竪穴建物 (SH100)
全景 (垂直写真)



掘立柱建物群
(SB1・SB2・SB3)
(垂直写真)



掘立柱建物（SB1）
全景（南東より）



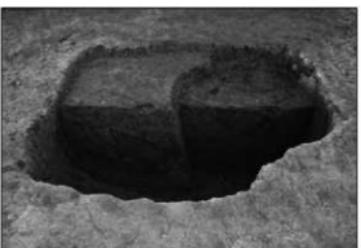
掘立柱建物（SB2）
全景（南東より）



掘立柱建物（SB3）
全景（南東より）



柱穴（SP152）土層断面（北東より）



柱穴（SP153）土層断面（北東より）



柱穴（SP154）土層断面（北東より）



柱穴（SP157）土層断面（北東より）



柱穴（SP156）土層断面（北東より）



柱穴（SP156）遺物出土状況（北東より）



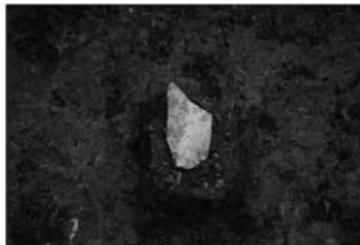
柱穴（SP146）土層断面（南西より）



柱穴（SP148）土層断面（南西より）



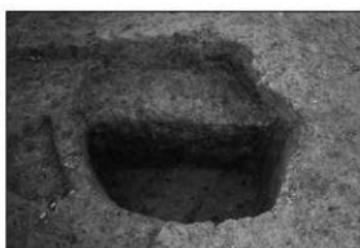
柱穴（SP147）土層断面（南西より）



柱穴（SP147）遺物出土状況（南西より）



柱穴（SP149）土層断面（南東より）



柱穴（SP150）土層断面（北東より）



柱穴（SP150）遺物出土状況（1）（北東より）



柱穴（SP150）遺物出土状況（2）（北東より）



柱穴（SP170）土層断面（北東より）



柱穴（SP170）遺物出土状況（北東より）

図版九



柱穴（SP151）土層断面（北東より）



柱穴（SP140）土層断面（南西より）



柱穴（SP141）土層断面（南西より）



柱穴（SP142）土層断面（南東より）



柱穴（SP143）土層断面（北東より）



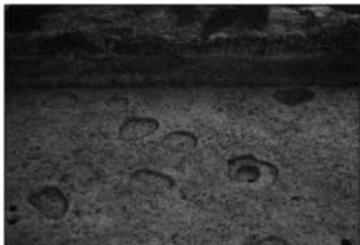
柱穴（SP144）土層断面（北東より）



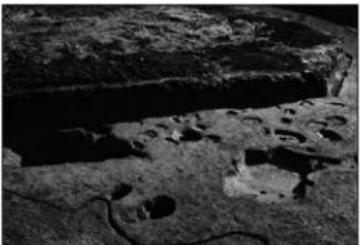
柱穴（SP145）土層断面（北東より）



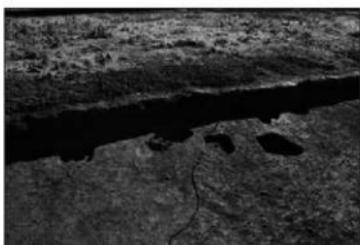
柱穴（SP145）遺物出土状況（北東より）



掘立柱建物（SB4）全景（北東より）



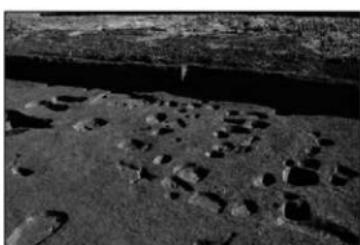
掘立柱建物（SB5・SB6）全景（北より）



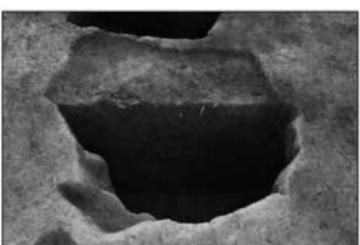
掘立柱建物（SB7）全景（北西より）



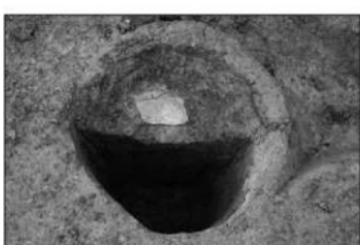
柵（SA1）全景（南東より）



柵（SA2）全景（北西より）



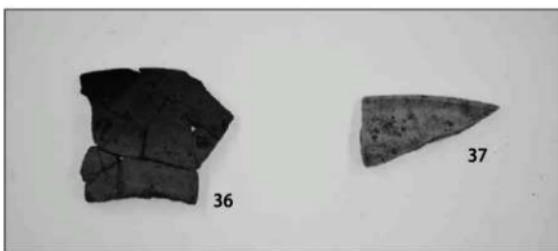
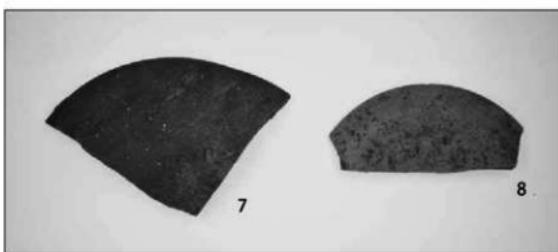
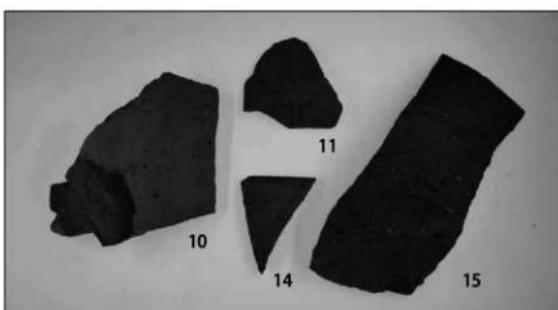
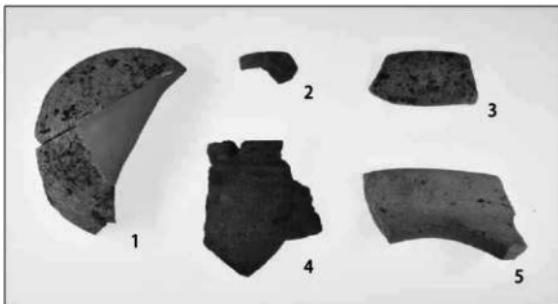
土坑（SK161）土層断面（北東より）



小穴（SP111）遺物出土状況（北東より）

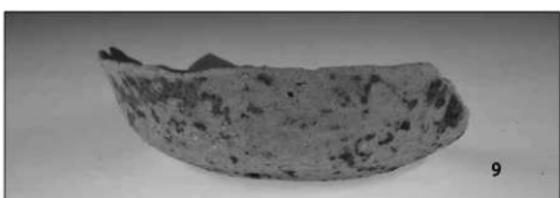


小穴（SP126）遺物出土状況（北東より）

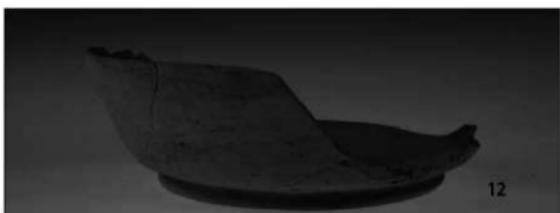




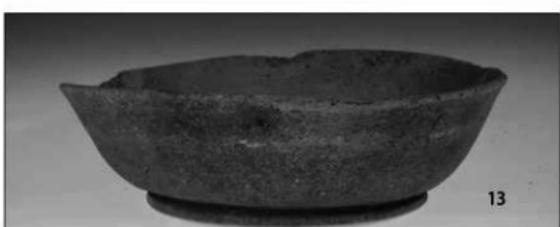
包含層出土遺物



包含層出土遺物



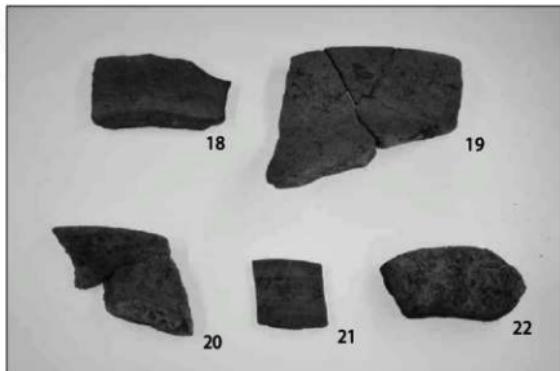
包含層出土遺物



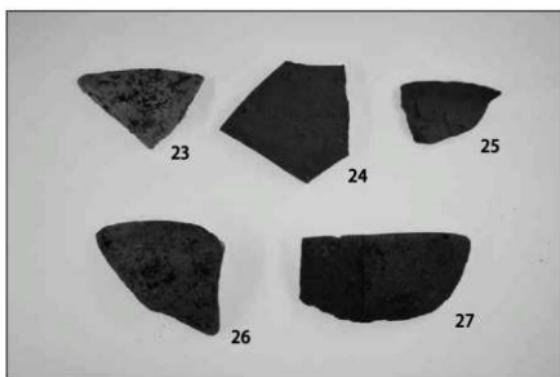
包含層出土遺物



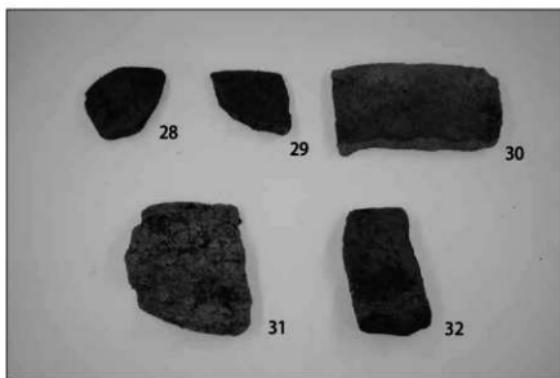
SP150 出土遺物



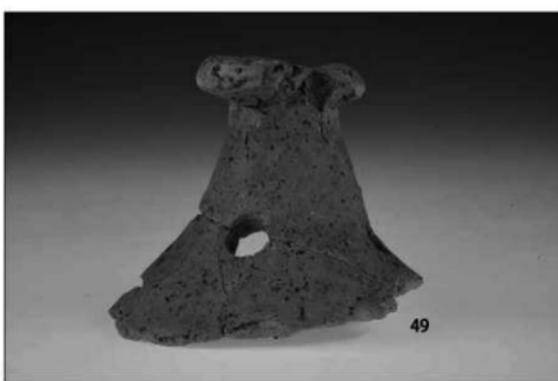
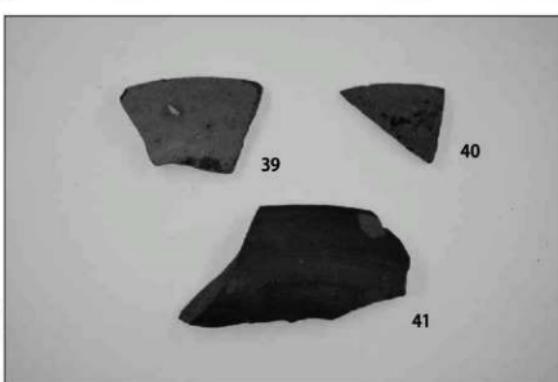
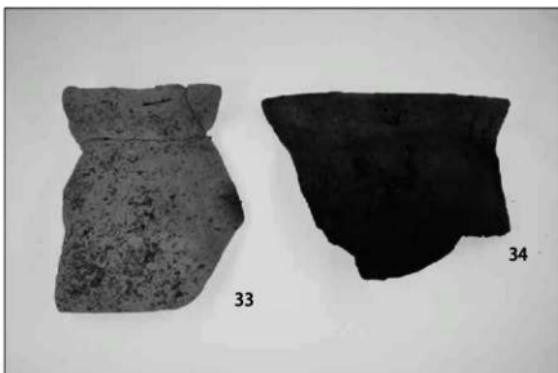
遺構面精查時出土遺物

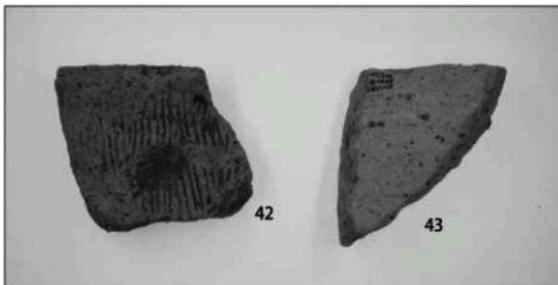


SH100 出土遺物

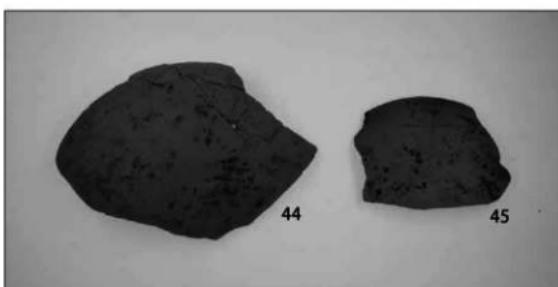


SH100 出土遺物

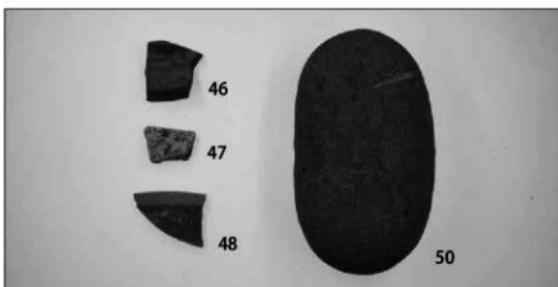




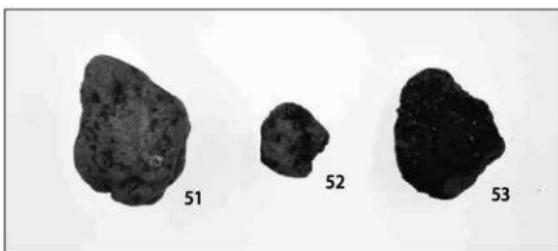
SP170:42
SP143:43
出土遺物



SP111 出土遺物



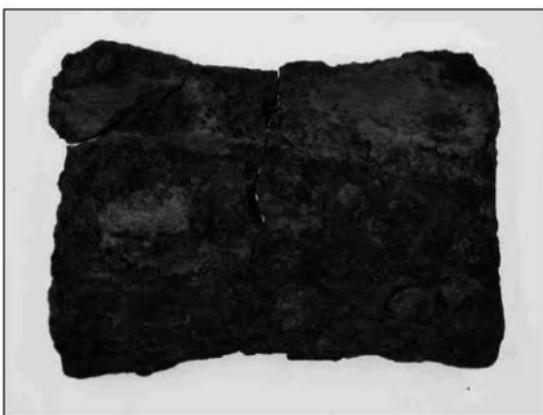
SK161:46
SK178:47
SP219:48
SK612:50
出土遺物



SD570 出土遺物



SH100 出土金属製品（35）表面



SH100 出土金属製品（35）裏面

報 告 書 抄 錄

ふりがな	みちのしたいせきだい2じはっくつちょうさほうこくしょ							
書名	道ノ下遺跡第2次発掘調査報告書							
副書名	宅地造成工事に伴う発掘調査							
卷次								
シリーズ名	彦根市埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	81							
編著者名	林 昭男							
編集機関	彦根市 市長直轄組織 文化財課							
所在地	〒522-0001 彦根市尾末町1番38号 TEL 0749-26-5833							
発行年月日	20200331							
所取遺跡	所在地	コード		世界測地系		調査面積	調査期間	調査原因
		市町村	遺跡番号	北緯	東経			
道ノ下遺跡	彦根市 東沼波 町地先	25202	043	35度 14分 48秒	136度 15分 30秒	2,015m ²	20170615 ～ 20180329	宅地造成工事
所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物	特記事項		
道ノ下遺跡	集落	奈良時代 ～ 平安時代 前期	堅穴建物・ 掘立柱建物・ 溝・土坑・小穴	土師器・須恵器・平瓦・石製品・金属製品・焼成粘土塊	芹川左岸における奈良時代から平安時代前期の集落			

彦根市埋蔵文化財調査報告第81集
道ノ下遺跡第2次発掘調査報告書

-宅地造成工事に伴う発掘調査-

令和元年（2020年）3月発行

編集・発行：彦根市
 市長直轄組織文化財課
 彦根市尾末町1番38号
 TEL 0749-26-5833
 印刷・製本：近江印刷株式会社

MITINOSITA SITE

2020